

# 紀州漁民の活躍史とカツオ漁の今を考える

- と き — 2012年2月18日(土) 午後1時から4時30分
- と ころ — 和歌山県農林水産総合技術センター水産試験場
- 共 催 — (財)東京水産振興会・(社)漁業情報サービスセンター
- 後 援 — 串本町・和歌山東漁業協同組合・串本町商工会・和歌山南漁業協同組合すさみ支所  
すさみ町商工会・和歌山県農林水産総合技術センター水産試験場



2013年3月

発行：一般財団法人 東京水産振興会  
社団法人 漁業情報サービスセンター

## プログラム

主催者挨拶	栗原 修 (東京水産振興会課長)	13:00 - 13:15
挨拶	木村 創 (和歌山県農林水産総合技術センター水産試験場長)	
趣旨説明	二平 章 (漁業情報サービスセンター・茨城大学地域総合研究所)	

### 特別報告

紀州カツオ漁民と三陸のつながり	13:15 - 13:45
川島秀一 (リアス・アーク美術館副館長・民俗学者・気仙沼在住)	

座 長 武田保幸 (和歌山県水産試験場資源海洋部長)

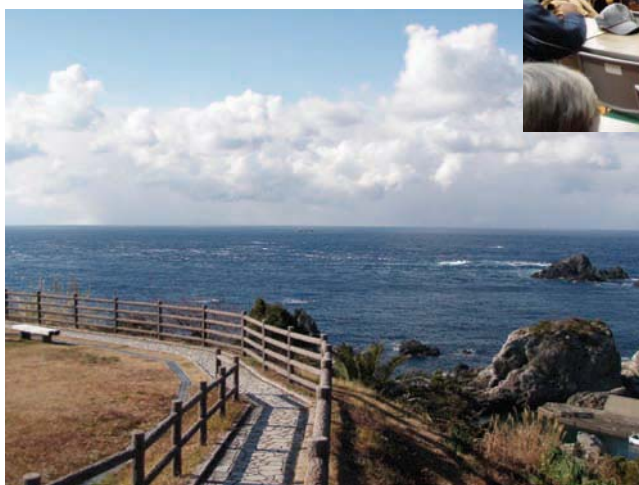
### 第1部 話題提供 紀州カツオ漁民の活躍史をさぐる

1. カツオ節発祥と印南漁民	13:45 - 14:00
坂下緋美 (印南町文化協会会長)	
2. 潮御崎会合衆とカツオ漁	14:00 - 14:15
杉本正幸 (串本町潮岬・郷土史家)	
3. ケンケン漁法の起源と各地への伝播	14:15 - 14:30
雑賀徹也 (串本町田並・郷土史家)	
4. 和歌山カツオのブランド化をめざして	
「すさみケンケン鰹」の取り組み	14:30 - 14:40
朝本紀夫 (すさみ町商工会会長)	
「しよらさん鰹」の取り組み	14:40 - 14:50
吉村健三 (和歌山東漁協理事)	

### 第2部 パネル討論「カツオ漁の今を考える」

司 会	二平 章 (茨城大学地域総合研究所)	15:00 - 16:30
1. 問題提起ー黒潮源流域のカツオの減少とひき縄漁	二平 章	
2. 輸入小型鰹節の問題点	細井哲男 (日本鰹節協会専務理事)	
3. 世界漁民大会で訴えたカツオ保護	鈴木正男 (千葉沿岸小型漁船漁協組合長 天松丸船頭)	
4. カツオひきなわ漁の現状	杉本武雄 (和歌山東漁協古座支所 富吉丸船頭)	
5. 黒潮とカツオ群れの変化	寺本正勝 (和歌山東漁協串本本所 安崎丸船頭)	
6. 旅漁でカツオを追って	長野 博 (和歌山南漁協すさみ支所 大洋丸船頭)	
7. 西日本ひき縄漁の変化	御所豊穂 (和歌山県水産試験場 副主査研究員)	

●閉会挨拶：高橋浩二（社団法人漁業情報サービスセンター・参事）





## プロフィール

### 【特別報告】

川島秀一（かわしま・しゅういち）

1952年、宮城県気仙沼市生まれ。法政大学社会学部卒業。東北大学附属図書館、気仙沼市市史編纂室、リアス・アーク美術館勤務を経て、現在、神奈川大学特任教授。著書に「ザシキワラシの見えるとき・東北の神霊と語り」（三弥井書店）、ものと人間の文化史シリーズ「漁撈伝承」、「カツオ漁」、「追込漁」（ともに法政大学出版社）など多数。自身も今回の津波で被災されている。

### 【話題提供】

坂下緋美（さかした・ひみ）

和歌山県日高郡印南町印南在住、郷土史家。1941年和歌山県日高郡印南町印南生まれ。県立陵雲高校、和歌山高等美容専門学校、東京人形学院短大科卒業。後に、故松島茂雄に個性美学を師事。着付・ヨガと人形作りの指導を行う。それらを通じ海外各地で文化親善交流を体験。2003年、印南に帰郷、公民館運営審議委員会会長、社会教育委員等々を歴任、現在、印南町文化協会会長、公民館印南分館長。印南ふるさと歴史研究室代表で紀州語り部。シニア学園、健康ダンス講師などでも活躍中。

杉本 正幸（すぎもと・まさゆき）

和歌山県東牟婁郡串本町潮岬在住、郷土史家。1934年和歌山県西牟婁郡串本町潮岬生まれ。串本高校卒業後、大手銀行に勤務。定年退職後、串本に帰郷。杉本家のルーツ探しがきっかけで郷土史研究を開始。現在、潮御崎神社を中心とした地域の歴史を研究している。潮御崎神社氏子総代、宗教法人高松寺総代、潮岬区長などを歴任。趣味は磯釣りと読書。

雑賀 徹也（さいか・てつや）

和歌山県東牟婁郡串本町田並在住、郷土史家。1942年和歌山県西牟婁郡串本町田並生まれ。串本高校卒業後、自動車整備専門学校から会社員を経て、田並で自動車整備業を自営、現在は隠退生活を送る。郷土史研究を始めたきっかけは、1985年に町立田並中学育英会で冊子「ハワイ移民とケンケン船」を編集したこと、祖父が船大工の棟梁としてハワイ型ケンケン船造船に携わったこと、父親が昭和初期にハワイでカツオ漁を経験したことである。明治10年代から海外に雄飛した田並の先人達が、戦前戦後に村の経済を支えてくれたという感謝の気持ちで調査研究を続けている。



朝本 紀夫（あさもと・みちお）

1942年和歌山県西牟婁郡周参見町周参見生まれ。県立田辺高校卒業後、家業の朝本石油から（有）すさみ交通勤務を経て、退職後の2003年に体験釣りの「マリンクラブスサミ」を設立。1993～2011年すさみ町議会議員、各委員長、副議長、議長を歴任。一貫して地域振興事業に取り組む。ビルフィッシュトーナメント、オフショアトーナメント、浮魚礁設置、「すさみケンケン鰹」と「イノブタ」のブランド化の中心人物として活躍。2009年以降、「すさみ町まちづくり協議会」、「NPO法人魅来づくりわかやま」を設立し、過疎高齢化で衰退する地方を「なんとかしなきゃ！」という一心で事業に取り組んでいる。現在、（有）マリンクラブスサミ社長、マリンスポーツフェスティバル実行委員会委員長、すさみ町観光協会会長、すさみケンケン鰹ブランド委員会委員長、すさみ町商工会会長、NPO法人魅来づくりわかやま代表。「地域の魅力再発見」をテーマに各地で講演やテレビ出演多数。

吉村 健三（よしむら・けんぞう）

和歌山東漁協、万寿（ます）丸船長。1942年和歌山県西牟婁郡串本町串本生まれ。中央大学商学部卒業後、会社勤務を経て1969年に帰郷、家業の漁業に従事し現在に至る。主に養殖業、定置網、敷網漁、ひき縄漁を営む。長年にわたり地元漁協の理事、串本漁協組合長を歴任、「しょらさん鰹」の地域ブランド化など地元串本町の水産振興に取り組む。特技は剣道五段で、地域のスポーツ振興と青少年育成にも貢献している。

#### 【パネル討論者】

細井哲男（ほそい・てつお）

1943年中国河北省で生まれ、東京で育つ。1966年一橋大学卒業後、大正海上火災(株)に2年間勤務。父親の鰹節卸業が手不足となり家業に従事、1990年社長に就任。業界に入ってから鰹節卸業界青年会や、原料仕入れで行く生産地の製造家たちから、カツオ、サバ、ソウダガツオ等の知識や産地情報を教わる。2011年1月の黒潮町での日本カツオ学会発会の際、二平 章氏の講演を聞き、カツオ資源に関し危機的関心を持つ。その後、日本の水産資源の勉強を始め、我が国漁業は、根本的に漁業法を改正しなくては回復できないのではないかと危惧、打開策を模索している。現在、(社)日本鰹節協会専務理事、東京鰹節類卸協同組合理事（2012年5月まで6年間理事長）、(株)ホソイ食品代表取締役。

鈴木正男（すずき・まさお）

千葉県新勝浦漁協所属、天松（てんしょう）丸船長。1949年千葉県勝浦市生まれ。県立勝浦高校無線科卒業後、18歳で父と叔父が操業する8トン船に乗船。以来、カツオひき縄漁を中心に操業して青ヶ島から八丈島方面にまで出漁。勝浦の漁師仲間と同様、子供たちはカツオの漁で育て上げることができたと自負している。ひき縄のカツオ漁がおかしくな

ったと感じて、1994年に大型熱帯まき網船の「過剰漁獲問題」を訴えに、当時の組合長と二人でフィリピンセブ島で開催された「世界漁民会議」に参加、日本のひき縄船の窮状を訴えた。沿岸つり漁業の安定経営のために資源管理の大切さを訴え続けている。千葉県下各漁協所属組合員の横断組織である千葉沿岸小型漁船漁業協同組合の副組合長を12年間務めた後、2012年より組合長。2013年には千葉県海区漁業調整委員会委員に就任した。

杉本武雄（すぎもと・たけお）

和歌山東漁協古座支所、富吉（とみよし）丸船長。1949年和歌山県東牟婁郡古座町古座生まれ。古座中学卒業後、父親、兄とともに漁業に従事、現在に至る。主にカツオひき縄（ケンケン）漁、イワシ敷網、イセエビ刺網漁に従事。その間1974～1978年に三重県の遠洋カツオ一本釣船に乗船。1979年に帰郷しFRP船を建造、毎年カツオを追って伊豆諸島から房総沖に旅漁を続ける。東牟婁地方の若手漁業者からの信頼が厚く、若手を指導・統率する漁業者の1人。長年古座漁協の理事を務め、組合経営の安定化に尽力する。1969年の漁協合併後は古座支所長。漁業士会活動に熱心に取組み、和歌山県漁業士会副会長を歴任。

寺本正勝（てらもと・まさかつ）

和歌山東漁協串本支所、安崎（あんざき）丸船長。1938年和歌山県西牟婁郡和深村（現串本町）生まれ。串本高校卒業後、3年間大阪でサラリーマン生活を経験し、21歳で帰郷、父親・弟とともに家業の漁業に従事、現在に至る。主にマグロ延縄漁に従事、近隣のマグロ船団を率いて全国各地で操業し、その活動範囲は南西諸島～小笠原～三陸沖～北海道の広範囲にわたる。津軽海峡（大間沖）、北海道沖などのマグロ漁場の新規開拓とその漁獲の多さで名を馳せる。旅漁先では、ジャンボ漁などの漁法や鮮度保持方法を惜しみなく指導し、現地の漁業振興に貢献。串本漁協（和歌山東漁協）では長年理事を務めた。延縄漁業引退後は地元でカツオ曳縄漁業等に従事。ノンフィクション「聞き書きにつぼんの漁師」やテレビ出演多数、2012年には紀伊民報社「紀南の100人」に選ばれる。

長野 博（ながの・ひろし）

和歌山南漁協すさみ支所、大洋（たいよう）丸船長。1940年和歌山県西牟婁郡周参見（すさみ）町周参見生まれ。周参見中学卒業後、16歳で父親とともに漁業に従事、現在に至る。主にカツオひき縄（ケンケン）漁、マグロひき縄漁、イワシ敷網、スルメイカ釣漁に従事。20歳から長年、対馬、伊豆諸島～房総～三陸沖に旅漁を続ける代表的な紀州のひき縄漁業者。漁具や漁船についての研究家として全国各地にその名が知られている。1981年に北海道日本海側でクロマグロ対象のひき縄漁に従事。翌年に北海道漁連の要請により、県水産課職員と利尻島へひき縄漁法の指導に行く。すさみ漁協（現和歌山南漁協すさみ支所）では長年総代を務め、現在地区委員。

御所豊穂（ごしょ・とよほ）

1975年東京都生まれ。京都大学農学部修士課程修了後、和歌山県水産試験場へ。紀伊水道におけるイワシ類シラスの資源生態について調査研究を行った。その後、和歌山県農林水産部水産局資源管理課に3年間勤務し、行政マンとしてイサキ資源回復計画策定と底びき網漁業の資源管理・調整に関する業務に従事。2007年より、水産試験場でカツオ・マグロ資源調査および海況予測に関する調査研究に携わる。2012年から、和歌山県企画部地域政策課主査。

【コーディネーター】

二平 章（にひら・あきら）

1948年茨城県大子町生まれ。北海道大学水産学部卒業後、茨城県水産試験場で長く研究員生活。東京大学海洋研究所研究員、東京水産大学非常勤講師、立教大学兼任講師などを兼任。現在、茨城大学地域総合研究所客員研究員、社団法人漁業情報サービスセンター技術専門員、北日本漁業経済学会会長。農学博士・技術士（水産部門）。2001年にカツオの回遊行動研究で水産海洋学会宇田賞受賞。「カツオの自然誌」を高知新聞に連載中。

武田保幸（たけだ・やすゆき）

1960年和歌山県田辺市生まれ。県立田辺高校から琉球大学理学部海洋学科卒業後、和歌山県水産試験場へ。2年間の東牟婁振興局勤務をはさんで、長年紀伊水道におけるイワシ類、アジ類、サバ類、サワラについて資源調査研究を続ける。専門はアジ類を中心とした浮魚の資源生態。2005年から3年間、和歌山県農林水産部水産局資源管理課で勤務し、漁業調整、TACの計画策定、内水面漁業振興に関する業務に従事。2008年より、水産試験場でマグロ・アジ類サバ類資源調査および海況図作成に関する業務に携わる。現在、和歌山県水産試験場資源海洋部長。



来賓挨拶

三鬼則行

(全国近海かつお・まぐろ漁業協会会長)



ただ今ご紹介いただきました、全国近海かつお・まぐろ漁業協会会長の三鬼則行です。どうぞよろしくお願いいたします。本日は、主催者の皆様のご配慮により、串本町でカツオ資源に関する会合が開催されましたこと、この場をお借りしてお礼を申し上げます。まことにありがとうございます。

さて「食」と「漁」を考えるシンポは今回で10回目を数えますが、10回のうち、カツオ資源については平成22年1月に愛媛県愛南町と高知県黒潮町、平成24年2月に再び高知県黒潮町と4回開催されております。我々国民、および漁業者にとって、いかにカツオ資源のテーマが重要であるかを表しているものと考えております。

私たち全国近海かつお・まぐろ協会は、カツオ釣りの中型船および小型船の団体ですが、同じ資源を国民に供給する漁業者として、カツオ資源の変化に、皆様と同じ心配をしております。カツオ資源については、近海カツオの漁獲に応じて、行政および研究者、漁業関係者らによってカツオ資源検討会が開催されておりますが、漁業種類の違いから、同じ方向を向いた議論になっていない状況です。カツオは太平洋を広く回遊しており、日本近海の議論だけではすまされないものと考えております。したがって、国際会議に幅広く参加し、協議の動向を注目しています。国際会議では、研究者の意見が中心となりますが、研究者に現場の意見を理解させるのが、我々の責任ではないかと考えております。現場で身をもって感じる資源の変化、現場の姿、状況を発信し続けていくことに意味があると考えております。このようなシンポジウムの開催が、地域や中央の意識変化につながるものと信じております。

皆さんにおかれましては、日々大変なご苦勞の中で操業をされていることと存じますが、本年1年間の航海の安全と大漁を祈念して、挨拶に代えさせていただきます。ありがとうございました。

## 来賓挨拶

木村 創  
(和歌山県水産試験場長)

和歌山県水産試験場の木村です。どうぞよろしく申し上げます。開会にあたりまして、一言ご挨拶をさせていただきます。本日は本当にお忙しい中、本州最南端の非常に交通の悪い所へ、たくさんの方々にご参集いただきまして、本当にありがとうございます。また、本日も講演をいただく皆様、それからご協力いただきました方々、本当にありがとうございました。

皆さんご存じのように、和歌山県の紀南地方にとって、カツオは非常に重要な資源となっております。黒潮が近いということで重要な資源です。また和歌山県は、カツオ漁業の発祥の地でもあり、またケンケン釣りの発祥の地でもあり、近世のカツオ漁業を支えてきた重要な所です。ところが、2～3年前から非常に不漁が続いております。昨年度は近年にみられないぐらいの大不漁ということで、地域に与える影響、それから皆様の懐も大打撃を被っていることと思います。水産試験場ではカツオについて遠洋水産研究所（現在、国際水産資源研究所）と共同で調査研究を行っていきまして、近年の不漁についていろいろ考えているところです。

このシンポジウムは昨年の12月に発案者である、二平先生がうちの研究員と各組合を回って話をしながら、カツオというのは非常に重要な魚なので、この潮岬でカツオのシンポジウムをやろうという話が持ち上がり現在に来た状況です。我々、水産試験場のやっぴいことを紹介し、皆さんからいろいろなお意見を聞くことが非常に重要だと思っていますので、非常にありがたい機会を頂戴したと考えております。本日はカツオに関する歴史、文化、ブランド化、漁業資源と非常にたくさんの分野にわたっておりますが、是非ご活発な意見をいただいて、水産試験場でカツオの研究が続けられるようにご指導の程よろしく申し上げます。本日はどうもありがとうございました。



## 趣旨説明

### 二平 章

(漁業情報サービスセンター・茨城大学地域総合研究所)

今回の開催趣旨をお話ししてから、皆さんの報告に入らせていただきます。

仕事柄、魚や漁業のことを調べると、必ず紀州とのつながりが出てきます。私は茨城に住んでいますので水戸藩です。水戸の殿様と紀州のお殿様は同じ徳川家で親類です。漁業もとっても深いつながりを持っていて、漁業のルーツを探っていくと、みんな紀州にたどり着いてくるのです。そこで、今回のシンポジウムでは是非、紀州でカツオをテーマに、昔と今を語りたと思った訳です。昔から現代に至るまでの紀州漁民と紀州漁業の素晴らしさを知っていただき、未来に向けて一歩でも二歩でも進めていくためにどうしたらいいかということ、考えてみたいと思い、企画をさせていただきました。

紀州の方々、東の国、西の国と広く日本を旅漁をする中で、全国の漁民、漁業に多大な貢献をされてきました。紀州の皆さんは今も昔同様、旅漁にでられて活躍をされています。そのような姿を私なりに記事にさせてもらいました。資料の新聞記事にいくつか私が書いた記事がありますので、後でご覧いただければと思います。

江戸時代以前から、紀州の方々、旅漁をして、北海道から五島列島まで小さな船で帆や櫓を使い出向いていました。そうして三陸、関東はもちろん、土佐、日向、五島列島まで行き、現地漁業の発展に貢献されました。特にカツオの釣りだめ漁法という、今のカツオ一本釣りの原型の漁法を全国に広めていきました。他に房総の地びき網や巻き網のルーツも紀州です。また、今はもう全国の漁法となった、ケンケン漁。これは、紀州漁民の方々が全国で講習会をして広げていきました。ルーツはこの紀州にあるのです。

鰹節は日本人にとって本当になくしてはならない加工品で、このルーツも紀州です。そういう意味では紀州の方々が、今の日本漁業の原型を作ってきたのだとあってよいと思います。本日は有名なケンケン漁、いわゆるひき縄漁で、旅漁をされている現役の漁業者の方にも登場していただきます。今カツオにどのような問題が起こっているのかということについて、多方面の方々と共に議論をしていきたいと思っています。

それでは、半日間のシンポですが、どうぞよろしくお願いいたします。





## 特別報告

紀州カツオ漁民と三陸のつながり、

川島 秀一

(リアス・アーク美術館副館長・民俗学者)



宮城県の気仙沼から来た川島です。よろしくお願ひします。私は仕事の都合上、実は昨日 17 日の午後からこちらへ向かったんですが、時刻表に顔を突っ込んでみても、昨日の午後に出発するとどうしても昨日中にはここには着かないんですね。仕方がないので昨日は松阪に泊まりました。今日は勝浦まで来て、友人の新宮市議さんにここまで車で送っていただきました。いつも思うんですが、我々のいる気仙沼、仙台から 3 時間という距離がありますから、こちらから気仙沼へ伺った方にとっても、やれやれと。陸から見れば、陸の孤島と呼ばれている三陸地域です。こちらもそう言われているかもしれません。でもこれは明治時代に日本が陸上中心の交通体系になってからで、中世・近世は海からみればむしろ十字路でした。紀伊半島、三陸もです。今日は、カツオを巡る歴史と文化を通してちょっと一言お話できればと思っております。

資料は用意していただきましたが、前半にこういうことが書いてあるということをお話しまして、後半は私が今日持って来た写真を中心にお話をしたいと思います。

まずは延宝 5 年 (1677 年)、石巻市の狐崎というところの古文書です。延宝 5 年といいますが、太地で網掛け突き捕り法という新しい捕鯨法が発明された同じ年です。その同じ時期に、紀州の鯨漁師が牡鹿半島沖 (金華山沖) に来て、大変困っているということを訴えた古文書なんです。どういうことかといいますが、太地か三輪崎か、これはちょっとよく分かりませんが、紀州の鯨漁師が鯨を解体して脂を流しっぱなしにするので、根つきのアワビとか、タコとか、海藻類が駄目になってしまう、これを何とかしてくれないかというのが一つあります。それから、それまでは三陸の漁師たちは浜に寄ってきた鯨、浜にあがってしまった鯨をいただいていた。あるいは沖で拾ったものを自分たちがいただいていたんですが、ある時紀州の漁師から「自分が銚を打った鯨であるから、売上げた益の半分をよこせ」ということを言われたわけです。三陸漁師にとっては紀州の漁師にいちゃもんを付けられたような感じです。さらに訴えたのは、鯨はイワシを追い込んで、三陸沿岸の入り組んだ湾ですから、浜の漁民に恵を与えてくれたと。それが鯨を捕ることによって、イワシも少なくなってしまう。それから、捕鯨だけではなくて、この船はカツオも獲っていたということです。資料には、そこで紀州の船と三陸の船のどこが違うか、漁法とか、そういったことが書いてあります。

まず紀州は早舟づくりです。当時の捕鯨船だと思っんですが、水夫 (かこ) が 14、5 人、

艘が一丁に二人がかりということで、大体八丁艘の船で来ていたわけです。それから、棒受網というもので、餌イワシを獲りながらカツオを釣っていました。それから、飯米（いまい＝米）をたくさん積んで出ていった。ということは、沖泊まりをして、漁場を長時間管理できるというようなことができていました。

ところがそれに対して三陸の漁師は、船に10人ぐらいはまず乗れます。ところが田畑の仕事がある、あるいは陸の役職がいろいろあって、1日に2、3人は必ず交代をして船に乗ったということで、純粋な意味では専業の漁労民ではなかったということです。それで、カツオ自体も「カツオ待ち居り漁」という言葉が出てくるように、カツオを待って獲っていた。紀州のように積極的に餌イワシを積んで沖へ行って漁をするという漁法ではまったくなかった。これは致命的なことです。それで、この牡鹿半島の漁師たちは、とにかく紀州の漁師が沖でカツオを獲ってしまうので、待って獲っている我々にとってはカツオも獲れなくなる。鯨もイワシもカツオも獲れなくなる。あげくの果て、鯨の脂で塩田もできなくなる、根付けの貝や海藻も獲れなくなるということで、訴えています。この訴状は一体どうなったのかというのはよく分からないんですが、いずれ仙台藩では、このカツオの一本釣り漁が定着することになります。

私がいる気仙沼市の唐桑町の鮪立（しびたち）鈴木家古館（こだて）という屋号の古文書です。昭和24年に発見されたもので、この鈴木家自体が紀州の出自です。岩手県と宮城県の境にある山は室根山といまして、名前の由来は紀州の牟婁郡からきています。室根山は新宮と本宮が勧請されておりまして、うるう年の翌年に大祭があります。その際の潮献上役、お祭りの時に潮をくんでいく役割をこの鈴木家が担っていたんです。

その鈴木家に紀州の漁師がやっかいになるわけです。この文書の初めに、「紀州様お百姓共釣りためにまかりくだうそうろうを、五隻抱えおき、御村の手習いにいたさせもうしたくそうろう」とあります。釣りためというのは、先ほど二平先生からも紹介がありました、ため釣りになるので、カツオ一本釣り漁のことを指します。仙台藩では、この後テントウ船とか、ゴダイギとか、大きな船になるのですが、その3番目くらいに、釣りだめという言葉の船の名前が出てくるんです。これはちょっとよく分からないんですが、釣りだめということは、もしかしたら三陸の漁師が付けていった名前ではないかと。この言葉は、おそらく三陸の漁師たちが、紀州のカツオ船の何に対して驚いたかをあますことなく伝えている言葉だと思います。というのは、カツオ船というのは大型化していく必然性があります。どうしてかということ、まず活イワシを積まなければいけない。釣りながらでもです。それから、カツオ漁では短時間決戦型の漁です。できるだけ多くの人に乗って漁をするという、そういう大型船になる必然性があるわけです。それに対してやはり驚いたと思うんです。三陸の漁師を抱えた鈴木家では「五艘抱えおき」とあり、五艘ということは、前の文書では一艘に14、5人乗っているとなっていますから、約70人を抱え込むこととなります。そうすると、村からは総スカンにあつて反対が起きるわけです。けども、この鈴木家はめげずに、なんとかこの一本釣り漁を自分たちのものにできないかと苦労されます。

右側の下の段に面白いことが書いてあるんですが、カツオ漁というのはこの地方では春夏はできなかった。秋の戻りガツオというんでしょうか、陸近くに来る時に初めて獲っていました。だからこれも待って獲っていた「待ち居り漁」なのかもしれません。反対に、紀伊の国の者どもは、沿海のメヌケという魚を獲るあたりまで獲りに行っていた。そこはちょうど山ばかりとって、山をあてにして（山あてでもいいんですが、自分の漁場を確かめる方法です）そのぎりぎりの線なんです。山が見えなくなるぎりぎりの線まで来て獲っているんだから、我々の漁とは棲み分けできるという発想です。前の牡鹿の漁師は沖で獲っているから、我々のところにカツオが来ない。唐桑では、沖でも獲っているが、棲み分けできると。これはそれぞれの自然現象をどう感じていたか、その違いによって新しい漁法の受け入れ方が違ってくる。単純にどこでも紀州の漁法を受け入れたのではないということです。

それから子どもに習わせたという記述が出てきます。末代の重宝にする。今後、この村が成り行くために、是非ここで一本釣り漁法を覚えさせたいということです。子どもに習わせるということは、今後の村の専門にすることだけではなくて、あらゆる年齢層を組み込んだということです。まず子どもはご飯炊きをさせられ、カシキと呼ばれます。ある程度の新陳代謝ができ、永続性を図ったわけです。つまり、年齢階級制の漁労集団、14、5人から20人の、一つの小さな社会が作られたということです。以前は三陸地方でも漁師の息子などは、社会教育の一つとしてカツオ船に乗せられていました。人にもまれる、小さな社会の中でもまれるということですし、当時はカツオ船というのは花形でした。立派な人格者を育てるといふようなこともあって、どんどんカツオ船に乗せました。カシキのことは船頭が面倒を見ます。その次の、カシキよりちょっと上がった子どもは胴回りと呼ばれて、親父に面倒を見てもらう。カツオ船の艫です、船尾でカシキと船頭、胴回りと親父というような対で面倒を見てもらったと。こういった漁労集団は逆に漁村を経済的にも社会的にも支えることにもなります。支え、支えられるような関係です。東北というのは、本家、別家のやかましい所です、同族団がいる、同族的な社会です。そういった社会ですから、カツオ船は大きな船を造れば乗組員はすぐに対応することができました。それが村の支えにもなり、逆に村からもカツオ船が支えられてきたということが分かるかと思います。

ここが先ほどお話しをした、鈴木家のいた鮪立というところ。もっと家が建っていたんですが、被災して今はこういう状態です。これが鮪立の湾から見たところです。ここも下のほう、道路を思ったよりも上がらなかったんですが、津波で被災しております。

鈴木家、古館家です。海に近いのですが、今回の津波が上がってこない地形に建っておりました。ここに「三

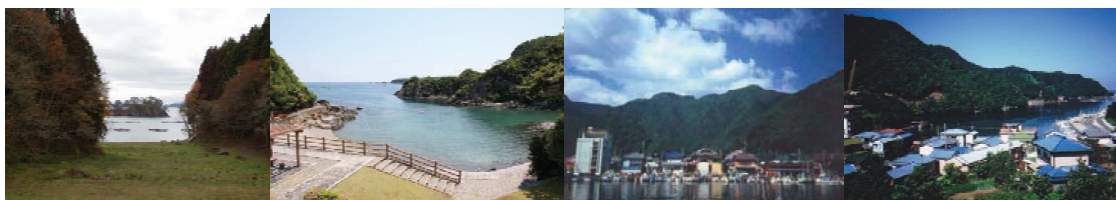




陸地方鯉一本釣り発祥の地」という碑を 2 年前に建てました。私も少しお手伝いをさせていただきました。紀州の漁師ですが、名前が出ているのは三輪崎（新宮市）の漁師で、そういったことなどが刻まれています。昔はここに船をつけカツオ漁を営んでいました。新宮市から市長さんが代々視察に来ておられて、友好的な関係を結んでおります。新宮市から来た方が、太地の畠尻湾に似ていると言ってくれました。



畠尻湾は「ザ・コーブ」で有名になった湾です。紀州と三陸はほぼリアス式海岸という地形を同じくしているところが共通点です。カツオ漁の基地を歩いてみると分かると思います。西伊豆の安良里、入り組んだ湾に山が押し寄せているような感じです。ここもカツオ漁の基地です。三重県大紀町錦の湾も同じような地形です。多分長島に移るあたりで撮ったかと思うんですが、こういう地形はほぼ三陸の海岸と変わらないと思います。高知県中土佐町の久礼も山が迫っているような地形です。

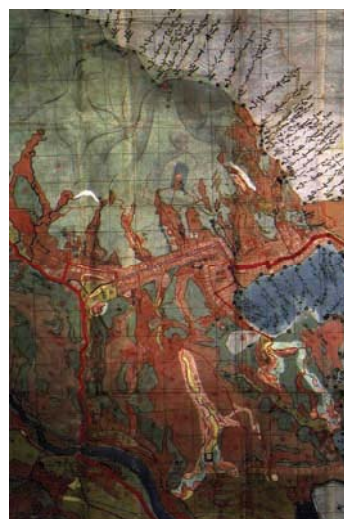


気仙沼湾は確かに自然の漁港でもありましたが、あえて埋め立てして成立してきた港です。今の港、市場は移っています。埋め立て技術としては、湾まで埋め立てられるはずなんです。あえて埋めないことで湾を造ったという町です。ところが今回の大津波で、その埋め立てたところに全部水が入りました。

カツオ漁の基地を通してリアス式海岸の写真をいっぱい見ていただきましたが、西伊豆町の田子の漁師さんがこう言っていました。カツオは山を目指してくると。それでリアス式海岸のような地形にカツオ漁の基地が生まれるわけです。昔からカツオの金華山参りという言い方があります。カツオは金華山まで北上する時は、片目だそうです。左目だけが見えて、右目があまり見えない。



山を目印にしてということなのでしょうけれども、陸に沿って上ってきて、金華山の神様に右目をいただいてから、沖の方に動くという言い方をしています。気仙沼の漁師さんも、ひなた目といって、カツオの右目が真っ白くなっているカツオを見ると言っていました。目のことはよく分かりませんが、このカツオの動き方は黒潮の動きなんです。金華山まで行ったあとは、沖に出てしまう。黒潮の動きに沿ってカツオが来ている。



その金華山には、もう一つこの紀州とか高知のカツオ船漁師にとって忘れられない儀式があります。それは「金華山踊り」といって、初めてカシキとして、あるいは若い連中がカツオ船に乗った時に、金華山と牡鹿半島を通る時に、船の上で踊りを踊らされるんです。



フライ旗（大漁旗）で体を包んだり、顔に炭を塗ったり、歯磨き粉を塗ったりして、ここから三陸だよという、一つの通過儀礼のようなことをさせられるわけです。和具（三重県志摩市）の源吉丸さんの、50年代の写真だそうです。金華山というのは一つのシンボルになっているわけです。三重県の漁師さんから聞きましたら、やはり金華山が見えると、ああ

もう秋になるまで家には帰れないんだと思うそうです。霧の深い、秋になるまでは帰れない。そう思われるくらい象徴的な山です。

リアス式海岸に何故カツオ漁の基地が多いのかの一つは、まず船を造る木材が豊富にあることです。先ほど言いましたように、カツオ船というのは大型化する必然性を持っているわけです。これは宮城の大島のゴダイギという船で、八丁櫓で



す。明治時代の写真ですが、おそらくこれは紀州の船を真似て造られた型の船だと思います。

カシキというのは、餌運びとか餌投げをします。中土佐町の絵馬を見ると、

赤いふんどしをするのが特徴です。

学生服の容姿で立っているのがカシキで、カシキが一漁期終わった時に、三陸地方ではお祝いをします。





「初乗り」といいます。それはお振舞に等しい盛大な儀式です。子どもがほとんど働いたお金を使ってしまうんですが、大体の船でも 8 割くらいは、シロをいただくというか給料をもらえるので、大概お祝いで使ってしまいます。

カシキになる時にみんなに配る引き出物をとっていた漁師さんがいたので、写真をとりました。時計など、当時としては立派なものを引き出物にするんですね。第51勝栄丸に乗った二人のカシキの記念です。三陸では必ず初乗りのお祝いをします。ところが、西日本ではあまり見受けられません。どうしてか分からないんですが、どちらかという西日本では初めてカツオを釣りあげた時にお祝いをする「初釣り祝い」というのがあります。それは三重県の阿曾浦でも聞きましたし、三木浦でも聞きました。初釣りをすると、船主の奥さんが今日は「初釣り祝い」をしようということで、ぼた餅を作ったんです。東では、そういうお祝いはいしません。これは文化の持っている一つの違いだと思います。



東日本の場合は、先ほども言いましたように同族団で組織を作ります。カツオ船も同族団で乗ります。つまり、その組織に入ったということ自体がお祝いになるんです。西日本



はやはり技量中心で、技術を身につけたことがお祝いという、その大きな違いがあります。

例えば鮪立の小正月の行事。予祝儀礼があります。カツオがその年にいっぱいとれるようにということでお祝いをします。これが三陸沿岸に目立っています。子どもたちを中心に、カツオが大漁の時に船の上で歌った唄を歌って、1軒ごとに歩きます。そして、カシキと呼ばれる少年が、歌った後に神棚の上にはちまきを投げあげて、うまく神棚の上に上がればその家は大漁だという、非常にプレッシャーがかかります。これはやはり子どものうちからそういった船内の組織、カツオ船の組織を体で覚えさせているんです。そういう習俗が東北には多いです。



カツノキ（ヌルデ）で作ったカツオを1軒1軒、カツオの大漁唄い込みを歌いながら配って歩きます。



ところが、紀伊半島では、正月だけではなくて、町や村の神社の祭日にも行われます。これは大王崎の波





切（志摩市）ですが、これもカツオの一本釣りの予祝儀礼です。大人がやっているということと、唄を歌うのではなく、竿を使つての物まねが多いということです。

志摩市船越のトツリアイと和具の潮かけ祭りです。

唯一子どもたち、中学生ですか、紀伊長島の長島神社の様子です。

二木島の室古・阿古師のお祭りです。3年前まではやっていたと思います。

紀伊大島串本の港祭りに出てくるタカノハをカツオの代わりにして入ってきます。

神津島でもやはりカツオ一本釣りの真似をします。これは奄美大島の加計呂麻島です。実際にカツオをつけてやっています。

坊津（鹿児島県）です。アカネカブリというものです。

このように、漁法が紀伊から三陸に伝わったということを考えるにあたって、やはりそれぞれの浜によって事情が異なるということ。それから、漁法は伝わっても、受け入れて育て上げる文化はそれぞれ違ってくる。「初乗り祝い」と「初釣り祝い」くらいの違いがあるということです。そのような違いがあるということです。

今回津波を受けて、気仙沼地方も壊滅的な状態ですが、おかげさまで生鮮カツオの水揚げ高は去年と変わらず日本一となりました。明治29年とか昭和8年にも三陸大津波がありましたが、その時には釜石市の両石というところでは、毎年来ていた宮城県の石巻市のいか釣り漁師を入り婿にして、家を再興していったという例があります。それから、今回の函館と久慈も、日常的なそれぞれのつきあいがあったために、すぐに漁船を支援したりしております。そういった海を通してのネットワークが気仙沼の復興を早めていくのではないかと、そのように信じております。このあと、紀州のカツオ漁の歴史とか、現在の様子についてご報告を聞くことを私も楽しみにしております。ご静聴ありがとうございます。

二平： どうもありがとうございました。本当ならばもっと長い時間いろいろなお話を聞きたいのですが、大変短い時間で申し訳ありません。それではここからは、地元の方々に紀州のお話をお願いしたいと思います。よろしくお願いたします。



## 第1部 話題提供

### カツオ節発祥と印南漁民

坂下 緋美  
(印南町文化協会会長)



和歌山県印南町から参りました、坂下緋美と申します。よろしくお願ひします。紀州印南漁民の活躍史についてお話しさせていただきます。



まず、印南の海岸線、港ですけれども、切尾の港と書いています。延喜7年、907年宇多天皇が上陸して、その頃から熊野詣でが始まったと言われる記念すべき港を持っております。印南漁民が江戸時代に活躍した現在の印南漁港と、真ん中にかえる橋、現在の印南町のシンボルです。

さて、今日私が発表させていただくにあたって、先人の先生方は本当に苦勞なさって研究をしてくださいました。印南漁民についてもものすごく情熱を持った方々がいらっしゃいました。お名前は申し上げませんが、昭和54年に印南漁民の土佐遺せき調査団として派遣されて、それから研究をもっと深められていったようです。



さて、その先生方の研究によりますと、江戸時代初期の印南村には海の快男子がぞくぞくと誕生したそうです。先ほどの先生のお話にもありましたように、25人乗りの大型船に乗ったような、豪商の船主たちがぞくぞくと生まれたそうです。名前を挙げますと、まず石橋五郎左衛門、後に鯨に力を注いだと言われていいます。次に戎羽右衛門さんは、大型船の先陣を切った方です。そして今日の中心になります、角屋甚太郎さんはカツオ船を発明した方。最後に中村次郎右衛門さんと、そうそうたるメンバーが揃っていたようです。

鰹節の歴史について、江戸時代を三期に分けて見ますと、前期には角屋甚太郎親子、現在の鰹節の基礎を作ったと言われる方がいらして、土佐で活躍をされたようです。中期には、今や日本一の鰹節の製造を誇る枕崎に鰹節の製法を教えたという森弥兵衛さんが活躍しておられました。それから後期は、千葉に土佐改良節を伝えたという印南与市。なんとこの三人ともすべて印南漁民であったということは、私どもも驚きであり、また誇りでもあると思っています。

さてその角屋甚太郎さんですが、後でお話を伺いますが、潮岬会合で、紀州の海から閉



め出されて、それで日向の方に向かったんだそうです。その時に土佐清水、足摺の臼箸（うすばえ）という所に格好の漁場を見つけて、そこを中心にして以後百何年か、先ほどの先生方のお話がありましたように、旅漁の姿で10か月は土佐、そして印南を2か月というような暮らしをして活躍をされていたようです。

初代の角屋甚太郎さんが臼箸で漁場を見つけたわけですが、鯉節を発明した方は二代目甚太郎さんです。実は、紀州の甚太郎というのは明記されていたようですが、それが印南の人であるかというのが分かりませんでした。ところが、1707年に二代目甚太郎さんが印南に帰られた時に、162名が亡くなった宝永の津波が起きました。その際に二代目甚太郎さんも亡くなって、印定寺というお寺さんに位牌が残っていました。それで先生方は甚太郎さんが印南の人だということの確証を得たそうです。その後、甚太郎さんの弟の甚三郎さんが後を継いで、代々角屋をもり立てていくわけですが、五代目甚三郎の時に悲劇がおきます。後でご説明します。現在は角屋十三代目が先祖の墓守をして、お醤油を作られています。



162名の合同位牌です。印南が壊滅状態になったそうです。二代目角屋甚太郎さんのおかみさんのお位牌。それらが印定寺にあったということです。裏側に浜の甚太郎、浜の甚太郎内儀というのが列記として残っています。またその当時の様子が書かれているようです。



お人形は、私がたまたまお人形を作るものですから、中学校に甚太郎さんと内儀さんの人形を作って今展示しております。境内には甚太郎さんを含む地震の13回忌の慰霊碑が1719年に



建立されました。甚太郎さんのお墓はないのですが、実質上これがお墓のような役割をしていると思われます。

さて、先ほどの悲劇が起こったということなんですが、五代目角屋甚三郎の一人息子、与市さんが悲劇を起こしました。ところが、この悲劇が起こったことによって、ま



現在の印南浜の高岩

た次の角屋のいろんな活躍につながるという、皮肉なことがございます。

一人息子の与市さんと、ヲサナさんという奉公人が恋をするんですけども、江戸時代は身分の違いの結婚は許されません。それで印定寺の十夜でみんながお寺に参っている時をみはからって、印南浦の高岩で心中をいたします。そういう悲劇がございました。現在の高岩の写真です。

父親の五代目甚三郎は本当にショックを受けまして、とても印南の海を見て暮らしていけないということで、自分の大きな角屋の家督を甥の儀三郎さんに譲って、そして船団を率いて土佐に生活の拠点を移すことになりました。その時に印定寺に二百両を渡して、二人の永代供養をお願いしたそうです。240年経った今も毎年永代供養が続いています。



角屋家ほか、印南漁民の位牌が祀られている印定寺

がちゃんと残っております。そして、右側が二人の供養ということで、檀家の方が200回忌に高岩の所から持ってきた石で比翼塚をつくり、現在も供養しております。



与市・オサナの永代供養



印定寺の観音堂は中村屋が寄贈したもの

2年後に心労で死亡いたします。それで、印南の角屋は父親の定吉さんに譲って、儀三郎さんが土佐に行くわけですが、この儀三郎さんの土佐での後見人として叔父である与三郎も一緒にいくことになり、この方が大人物で土佐で華々しい活躍をします。亡くなった後も現在も、「旦那さんの墓」として大事に守られております。印南の与三郎さんのお墓は印南にも土佐にもあります。昨年、一昨年とお参りいたしました。印南の名残のある吉福家住宅、国の重要文化財ですが、そういうものがたくさん残っております。







印定寺墓所・与三郎墓

土佐清水市松尾・角屋与三郎の墓、郷土史家榎原敬文氏の説明



国の重要文化財 吉福家住宅 (土佐・松尾)

本家に江戸時代(1653)没の印南清兼太郎の位牌がある

印南漁民が活躍した土佐にまつわる港には、印南漁民の墓が現在も五十何基あるようで、案内していただきました。逆に去年の5月に向こうから皆さんがお見えになって、角屋甚太郎の位牌などをご案内して、大変感激していただきました。そして、カツオ文化についての交流会が土佐と印南でということで、開催することができました。

印南漁民が活躍した・現在の土佐清水・松尾の海と民家



森弥兵衛さんについては、印南生まれであることは分かっているんですが、資料がございません。他国に技術指導をすることができなかつた当時、

どうして森弥兵衛さんが枕崎に伝えることができたのかというのは、先生方の推察によると、印南の高いカツオ技術に目を付けた薩摩藩から何か要望があったんだろうということが一つ。二つ目は先ほどお話しした津波の後に森弥兵衛さんが行きましたので、おそらく



土佐清水の印南漁民の墓所を訪ねる

自身の縁者が全員亡くなられて、印南に未練を持たなかつたんだろうということ。そしてまた、紀州藩も全滅した印南に束縛はできなかつたんだろうと言われております。



土佐の一行は、印定寺に参拝、甚太郎の位牌を見て感激

印南与市について、この人も印南生まれで、千葉、そして伊豆に鰹節製法を伝えました。この方は、掟を意に介せず他国に広く製法を広げたようです。50歳頃印南

に帰られたのですが、掟を破ったということで返されたんだそうです。でも最後には、千葉、伊豆で大事にあがめられて、まつられたと言われています。

最後に宮下章先生の言葉をお借りして、最後の結びにしたいと思います。「カツオ漁法と鰹節の製法を全国の主要産地に伝えたのは、期せずして紀州印南浦の三人の漁民であった。彼らの創始努力はやがて身を結び、土佐、薩摩、伊豆は天下に渡る鰹節の



印南町公民館で、鰹節文化交流会(23・5・13)



名産地になった。カツオの漁業におよそ恵まれない印南浦から三人もの偉大な功労者を生んだのは驚異だが、その根底には海を愛して勇敢に立ち向かう印南漁民の姿があった」。私どもも先人の心意気を今こそ心に刻みたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

**武田：** 印南が発祥だということで、鰹節が江戸時代の初めにあったということでした。ありがとうございました。



## 第1部 話題提供

### 潮御崎会合衆とカツオ漁

杉本 正幸

(串本町潮岬・郷土史家)



みなさんこんにちは。ただいまご紹介にあずかりました杉本です。潮御崎のカツオ漁と御崎会合（みさきかいごう）について紹介させていただきます。御崎会合は寛永14年、西暦では1637年、潮御崎（しおのみさき）神社を中心に、十八ヶ浦の漁師集いてカツオ漁の取り決めを行ったり、と古文書に記されています。御崎会合は近世から明治時代に漁業組合が設立されるまで続き、また戦後初めてできた和歌山県の紀南海区漁業調整委員会の基となりました。その初代会長は当時の串本漁協組合長、吉村宮一氏です。このことをもってみても、御崎会合の先天性、合法性は判断できるものと思います。

御崎会合については、当然のことながら、潮御崎神社宮司、潮崎氏が詳細に知るところですが、本日2月18日は宮講祭当日で出席できませんので、わたくしが代理を務めさせていただきます。故田島威夫、浜健吾、両先生の著書をもって解説させていただきます。なお、詳細については潮御崎神社所蔵の古文書に記されていますが、とても私に挑戦できるものではありません。

それではまず、潮御崎神社の由緒について申し述べます。第12代景行天皇28年、御崎の地である「静之窟（しずのいわや）」へ少名彦名命（スクナヒコナノミコト）を勧請した。その後現在地である「静之峯」へ遷座した後、貞観12年（871年）5月、潮見の端へ遷座する。明治2年（1870年）潮岬灯台建設のため、再び旧地静之峯（しずのみね）へ遷座し現在に至る。大国主命と少名彦名命は中津国を経営した後、紀の国の熊野の御崎より常世国に渡り給うと、古事記、日本書紀によるとこのように記されています。

それでは、潮御崎神社がなぜ中心になったかについて申し上げます。①潮御崎神社はその由緒のとおりですが、立地的には大変尊崇される場所に建立されていました。これは地元の方にはよく分かると思うんですが、現在の潮御崎の灯台のところに建立されていて、眼下には黒潮逆巻く海の難所が広がっています。②十八か村、現在のすさみ町見老津から串本町田原までが潮崎の荘であったこと。また、当地方は田畑が少なく生業は漁業であった。③本州最南端に位置し、黒潮本流が最も接近し、絶好の漁場であるが、反面自然環境は大変厳しく、神の加護が重要であった。

それでは本題の御崎会合について申し上げます。御崎会合は一つの漁業会にして、その創設、実に数百年前にあると寛永14年に記されている。古文書には「旧来の慣行」云々の文字があり、その古さを推定できる。この集まりは旧正月と5月と9月の18日に潮御崎神社で行われる。寛永14年にすさみ浦を加え十九浦となる。潮岬会合規約としては、一つ、カ

ツオ漁は毎年旧暦の3月3日より5月5日までは、最初カツオを飼い付したる、甲船釣り終わって後、乙船、次に丙丁と順次に釣る。一つ、5月6日より9月9日迄前記の法を転じて順次の別なく、互いに自身の餌鯛（えさいわし）をもって競って釣って良い。但し、会合外の漁船の飼い付した魚は、会合組の漁船見認次第、順次の分ちなく、競って捕獲しても拒むことは出来ない。そこで、会合船ですが、識別の方法としては、会合船はこういう旗を旗印にしているわけです。次に、一つ、餌床鯛を獲る時は、3月3日から9月9日迄餌網を使ってはならない。9月10日以後、翌年3月2日迄、餌網を使用しても良い。一つ、甲船餌床鯛を捕獲するのを、乙船認めてその船現場へ漕付けた時は、これを与えることにする。一つ、餌床鯛にまとい付いた諸魚を捕獲することを禁ずる。また、上野浦（うわのうら）字（あぎ）住崎（すみざき）沖より山崎、通夜島（つやじま）の西端ですね、までの間に海中へ落ちた人、或いは鉄物等を落とした時は、たちまち下り潮（くだりしお）変じて上り潮（のぼりしお）となる恐れがあり、これらの場合、早速く潮御崎神社にて清潔の祈祷をすること。この下り潮と上り潮なんです、地元の方は当然ご承知かと思いますが、遠来の方に申し上げますと、下り潮というのは黒潮の本流が接岸したということ。それから上り潮は離岸したということなんです、江戸時代には江戸のほうへ行くことを東下り、それから京、大坂の方へ行くのを上方と言った、こういう名残かと思います。一つ、字（あぎ）逆戸（さかど）で餌鯛を獲る時は、日々該所へ漕付けた者より順次餌網を使用する。但し、会合外の者には餌網を使用させない。また、字（あぎ）瀬島（せしま）で餌鯛を捕獲する時は、会合組の漁船順を追い互回に捕獲する。しかし、上野浦一浦（ひとつうら）共有の網代場に限り、諸魚の捕獲を禁止する。もともと右両所（逆戸と瀬島）といえども、鯛の外諸魚捕獲するのは、上野浦に限る。一つ、甲船の水夫はその船を退かざるうちは、他の船よりみだりに傭ってはならない。一つ、水夫は、その船を退かんとする時は、9月9日までに漁業主へ其の旨申し出ること。一つ、以上犯すものは会合席においてその責めあるものとする。また、明治になり、潮御崎近海において、海亀突捕り一切ならない。違反したものは、違約金5円なりを徴求する。

外来船に対しては、寛文12年（1661年）から延宝9年（1681年）にかけ、一つ、瀬島では先年より他浦、外来船ですね、外来の漁船は網を遣ってはならない。一つ、餌床では3月3日から9月9日迄網を使ってはならない。また餌床に入った諸魚は突き捕ってはならない。もし申し合わせに背き網を使い、また餌床に入りし魚を突いた場合、その鰹、その魚を組中え取り、その船には、過銭（かせん）として、御崎神社でお湯上げを申しつける。このお湯上げというのは、神前の釜で沸かした熱湯を神職が笹の葉に浸して、祈願者に振りかける清めの儀式だそうです。湯銭（ゆぜに）として12匁（もんめ）を徴求すると。その対象となるのは、はじめは潮御崎の西端住崎から、下（しも）は通夜島まで、即ち潮御崎神社の眼下に広がる海域で海にはまった漁師は、神域を汚したということです。以上のように、厳しい取り決めを行い、地先の安定的発展と資源確保に努めてきた。田辺以西の外来船は、田辺、印南（いなみ）、芳養（はや）、日高、比井、阿尾（あお）、三尾（みお）

等で、東は泊浦（とまりのうら）、長島浦、志摩浦等の漁船の乱獲防止のためでもあった。参考までに、餌床というのはイワシの群れがハマチ等に追われて団子状態になり、海面上に盛り上がる様子を言います。瀬島とは大島の通夜島の西側にある小さい岩礁です。3月3日より9月9日までの盛漁期には、この餌床を網ですくい取ってはならない。これは餌床をごっそり網ですくい取ると、他の漁船の餌罫の確保を不利にするため、タマですくい取れということです。このタマというのはこのへん独特の言葉で、よそではタモと言うと思います。

先ほど坂下様がおっしゃっていました、鰹節です。鰹節考として延宝2年（1674年）約338年前、紀州の漁夫、甚太郎なるもの、鰹の豊漁に生売りしきれず残魚を燻乾し、これが鰹節の始まりと言われている。世界百科大事典に1674年、延宝2年と出ています。江戸時代の初めには、土佐、薩摩、阿波、紀伊などの各地で鰹節が作られ、商品として取引された。中でも土佐節は有名で、延宝2年紀州熊野の甚太郎というものが鰹節を作り、次いで土佐の宮尾佐之助がその製法を習い改良して今日の鰹節をした。世界百科大事典から抜粋しました。

それからこれは潮岬に伝わる話です。潮岬伝聞として、潮御崎に十九浦随一の資産家鈴木某家あり、上野浦で漁獲したカツオを生売りし、残りしものを鰹節として加工し、大坂方面より船で商いに来たといわれている。当時は生売りするにも氷等冷凍設備はなく搬送の手段はなかった。鰹節として加工し、十九浦でとれたカツオを一手に商いをしたと思われる。なお、当時から近年に至るまでをみると、生業は漁業が主である。また、鈴木家は安政の大地震、1854年、約158年前の食料飢饉に際し、蔵米を放出し、浦人が危機を脱したと伝えられています。以上です。時間の都合上、外来他浦の会合について詳細は割愛しますが、寛永14年に印南、芳養、田辺等のカツオ獲り漁民が郡奉行所に、「餌床罫を自由に漁獲できない」と乍恐言上（恐れながら言上）と訴訟をし、会合側の漁民が返答書を提出し、会合側の主張が認められています。なお、潮岬の村史によりますと、安政の大地震の折、上野浦一体には野草もなくなり、江須崎まで取りに船で行くとありますが、江須崎というのはすさみ町見老津の手前ですね、そこまで船で取りに行くと言っています。だから、ここらは漁場が近いために、船が小さかったんだということです。そういうことでもあります。以上ですが、先人の乏しい資源を有効に活用し、地場の発展に寄与したことに敬意を表して終わらせていただきます。誠にありがとうございました。

武田：ありがとうございました。あと3分ほどありますが、質問があればお受けしたいんですが、ごさいませんでしょうか。私の方から一つ。神社は今現在も漁のお祓いとかは行っているのでしょうか。

杉本：現在は初午の日に、周辺の浦々からご祈祷に見えているようでございます。以前は御崎の初午といいますと、すごい人出だったんですが、この頃は少し減っているよ



うです。先ほどご祈祷のところでは言いましたが、鉄もの等を落とした時にという話があったと思います。今は潮御崎神社じゃなくて、串本の無量寺に金比羅様を奉っているところのお札をお渡ししているそうです。これは串本漁協で渡しているようです。

武田：ありがとうございました。3番のケンケンのほうに進みたいと思います。雑賀さんお願いします。



## 第1部 話題提供

### ケンケン漁法の起源と各地への伝播

雑賀 徹也

(串本町田並・郷土史家)



よろしくお願いたします。本日のテーマは、「ケンケン漁法の起源と各地への伝播」です。少しだけ理由をお話させていただきます。先人たちの海外雄飛のおかげで、戦前戦後を通じて、旧田並村は、田並村全体が経済的、あるいは文化的な支援を受けました。また寺や神社、学校といった施設にはじまり、子どもたちにいろんなものを送っていただき、田並地区民は物心両面で大変助かりました。そういうことと、たまたま昭和60年に中学校の育友会役員をしておりました時に、田並はケンケン漁の発祥の地であるので、育友会で何か作ろうかということになり、ハワイ移民とケンケン船という小さな冊子を作りました。私の父も昭和初期、カツオ漁師としてハワイで働いております。そして、祖父も船大工棟梁として、大正初期にハワイから持ち帰ったハワイ型ケンケンの図面を基に、田並でケンケン船を作っておりました。これは、西は周参見、東は田原、浦神、そのあたりまですぐ発展したそうです。このようなことから、縁と言うんでしょうか、何かの運命を感じまして、浅学不才ではございますが、発表させていただくことになりました。どうかよろしくお願いたします。

まず、田並の移民の始まりについてお話しします。田並では、明治17年に一人の方、海老名虎吉さんがオーストラリアへ行っております。これは多分、真珠関係の仕事だと思えます。この方は一人で行っておられます。その後、明治28年に矢部五郎吉（やべごろきち）さん他7名でハワイへ移民しております。この当時は漁業という正式な職業がなくて、農業移民として、初め3年契約で行っておりますが、そのうちの矢部五郎吉さんは農園を1年で脱走しました。脱走して名字も変え、そして現地の人と結婚し、漁業を始めます。その時に、矢部さんは田並における中筋五郎吉さんへ、ハワイではカツオがうなっているという表現をされております。うなるというのは、別の言葉で皆さんご存じだと思うんですけども、我々のこの地区では「たくさんある」という意味です。そして、中筋さんは明治32年に地元で新しい漁船、長さ約7メートル、幅1メートル75センチぐらいの小さな船を造り、家族と用具諸々を積んで、汽船でハワイへ渡っております。今ではちょっと考えられないようなことだと思えます。その時の日給が、大体1日18銭から、大工さんの日当で25銭の時代だそうです。ハワイの旅費としては、一人65円の渡航費がいったそうです。中筋さんは一攫千金を夢見て渡ったわけです。

ケンケン漁法と語源について話をします。ハワイの現地人や中国人は、7、8人でカヌーに乗って、布きれ3本くらいを束ねた紐へ針をつけ、海中で引っ張るといんでしょうか、

そういう簡単な方法でカツオを釣っていたそうです。餌でも釣ったり、その後だんだんと鳥の羽を利用したり、いろいろと工夫されたそうです。

ケンケンという言葉ですが、いろいろ調べてみますと、ハワイにケンケン鳥という鳥がいます。きれいな鳥だと思いますが、その鳥の羽を擬餌針と一緒にくくって引っ張ったことから、そのケンケン鳥の名前からケンケン漁ということになったようです。いろいろと説もあるんですが、これは和歌山県移民史とか、串本町史、また田並の漁師さんたちの座談会にもこういうことが出てきます。説は説として、これは間違いないかなと私は思っております。ケンケン漁の発展は、田並の人たちが持ち帰った、血と汗の結晶であり、田並がケンケン漁の発祥の地であることは間違いないと確信します。

次に中筋五郎吉さんの活躍についてお話します。中筋さんは帆船で餌をたくさん持って出てカツオを集め、擬餌針で大漁に釣る方法を現地の漁民の方に教えたそうです。餌を獲る方法としては、最初は栈橋でかがり火で集めていたんですが、虫が飛んできてどうにもならんということで、米袋をかぶって目だけを開けても駄目でした。結局、海中へ電灯を入れて獲る方法を考案したそうです。集魚灯というんですか。その後、中筋さんは、石撒（いしまき）漁法というのも考案しております。石撒漁法というのは、これも最近聞いたんですが、石をひょうたん型に削って、その石へ切り身をまいて、擬餌針を付けます。それだけでは沈んでいくので、浮きを付けてちょうどいいように調整したんだそうです。この漁法というのは、今はもうまったくというほど使われていないそうです。そういう漁法も中筋さんは考案しております。

明治42年に中筋さんは、当時漁船にはエンジンを積んでいなかったんですが、ガソリンエンジンを採用して、遠洋漁業を始めます。遠洋漁業は、ハワイでは約500マイル以上を遠洋漁業と言ったそうです。35年から40年にかけて、ハワイ漁船の5分の3は田並出身者で占められていたそうです。昭和13年の統計ですが、田並から248人の方が一斉にハワイに行っておられます。そのうちの約150名が子どもで、ほとんどが漁業に携わっていたと



いうことです。あとは女性です。結婚をされた方もあります。田並の場合はアメリカもあるし、いろいろな国に行かれています。全部合わせたら約600人近くの方が昭和初期に海外へ渡っています。そういうことから、和歌山県のアメリカ村と言われているのだと思います。日高郡にもアメリカ村と言われるところがあるんですが、あちらは多分僕が思うのには、カナダ方面が主要だと。でも田並の人は、アメリカ、ハワイが中心ですので、本当の意味のアメリカ村は田並ではないかと思うわけです。

次は、ハワイ型漁船、ケンケン船についてお話します。中筋さんは、ハワイのヨットにヒントを得て、田並から持ち込んだ漁船にデッキをはり、船体にペンキを塗り、船に改良を



加えました。左右舷側を庇（ひさし）型の張り出し板（台盤）で縁取り、波浪による動揺を防ぐ構造にしました。この台盤を田並では「ドカイ」という名前で呼んでいました。また、船体中心部にセンターボードという、鉄板を海中に埋めるようにして、船の安定を図ったそうです。ヨットが多分そういう構造になっていると思います。この構造で横揺れとかそういう揺れがなくなり、スピードアップにもつながったそうです。

ハワイ型ケンケン船の伝搬について、大正2年、小野七之助は、ハワイ型ケンケン船の図面と改良図絵を田並に伝えます。西は周参見、東は田原、浦神方面まで、先ほどと同じですけれども、広がりました。そして、小野氏はその功績が認められ、農林大臣より木杯（もくはい）を授与されております。多分大正末期か昭和の初め頃だと思います。

次に戦前戦後の日本各地へのケンケン漁法の伝播ということです。昭和9年焼玉エンジンで田並の田沼長五郎さん、吉田勇氏が五島、対馬へ出漁しています。この頃ちょうど田並では焼玉エンジンがではじめた頃です。昭和7年頃だと記録に残っております。そして、船体に青、白、赤、黒のペンキを塗っていたので、自ずときれいで、またデッキ張りだったので、地元の漁師の人たちが見物に来たそうです。戦中、戦後は混乱した時代ですので、多分油関係がなかったんだらうと思います。そして、昭和27年に田沼長五郎、浅利市太郎、森口季吉（すえよし）氏、そのほかの方々とまた五島、対馬方面へ出漁します。その後、随時田並の漁師さんも、四国、五島、対馬方面まで行くようになります。



昭和36年浅利市太郎さんが森口氏と三陸方面へ出漁します。各地で潜行板の扱い方を教え、水揚げ増大に貢献し、昭和38年浅利市太郎氏は銚子漁業組合長より表彰されました。その時、ちゃんとした海図がなく、浅利さんは鉄道地図で海を三陸まで行ったそうです。向こうの方々が、それをびっくりされて、賞状と一緒に褒美としてちゃんとした海図をくれたそうです。そして、浅利さんは銚子港で利根川の流れを利用して、潜行板のひき方を指導したそうです。操業中に地元の漁師さんが船の近くまで見に来るので、大変危険だった、恐ろしかったということも聞いております。そしてある日、銭湯の帰りに船に行ったら、その潜行板の道具を盗まれたそうです。そういうエピソードもございます。

田並のケンケン船の足跡は、三重、千葉、三陸、津軽、鳥取、五島、対馬、四国と広がり、各地で惜しみなく漁法を伝えてきたという歴史は、私たち地元民にとって大変誇らしく、この機会を与えていただきました関係者に感謝申し上げます。田並のケンケン漁の先駆者、パイオニアとしては、ハワイでは先ほど言いました中筋五郎吉さん、日本へ漁法をいろいろ伝えた小野七之助さん、最初8人で行って脱走して漁師になった矢部五郎吉さん、田並では田沼長五郎さん、浅利市太郎さんが田並の先駆



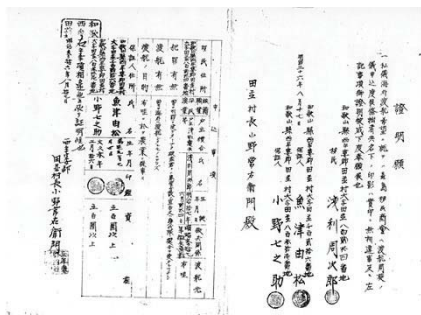


者と考えます。

大正末期から昭和の初期にハワイで進水した地元出身者のマグロ船は、今の田並のケンケン船とよく似ています。

これはハワイのホノルルケワロ港というところのカツオ船です。大正末期から昭和初期の写真です。

当時のカツオの一本釣り漁の釣っている様子です。着物を着ているように見えますが、これは着物ではなくて、消防団の方が着ている法被みたいな性質のものと思います。

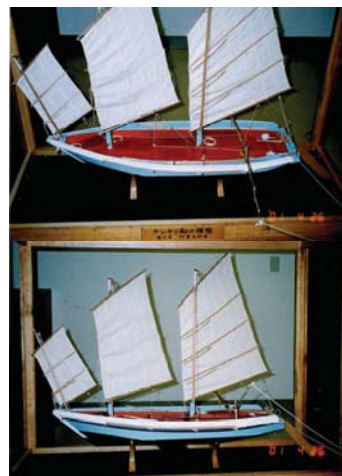


浅利周次郎さんがハワイへ行くための村長に出した証明願いです。興味深いのは、保証人2名のこの方は、明治より4年とか7年前の生まれです。それを考えますと、大変僕としては興味深いです。生まれ年が慶応を飛び越えて万延と文久の人らが保証人になっています。魚津由松氏とさっきの小野七之助氏が保証人になっています。

ハワイから伝わって、田並でできた原型船です。このドカイというのが両側に付けた40センチぐらいの台盤です。

当時の帆をやすめている潮待ちか、田並の港の船、昭和初期です。ある人が、白い蝶々が羽を休めているようであると、そういう表現をされておりまして。田並の風物詩でもあったと思います。

先ほどの、浅利市太郎さんが、銚子の漁業組合長の坂本さんという方にいただいた表彰状には、潜行板使用でいろいろ書いてあります。このように田並の人は全国各地で惜しみなく教えてきたということです。以上で終わります。皆さん本当にありがとうございました。



武田： ありがとうございました。ブランド化の話へ移りたいと思います。まず朝本さんお願いします。

## 第1部 話題提供

### 和歌山カツオのブランド化をめざして 「すさみケンケン鰹」の取り組み

朝本 紀夫  
(すさみ町商工会・会長)



今ご紹介を賜りました、ブランド化の委員長をしております、朝本と申します。私どもがブランド化に取り組んでちょうど10年になります。そういうことで、まず取り組みの経過です。と申しますのは、本来は漁協さんなのですが、私ども観光業界の中で二十数年来取り組んでおりました、カツオの味覚祭りというのがありますけれども、それが都内の方に全然人気がない。これはなんでやろということで、調査をしますと、カツオというのはタタキでしょという声がほとんどだったんです。我々が日頃食べているおいしい新鮮なお刺身、これが全然分かってもらえていなかった、そういうところから取り組みを始めました。



観光協会が主になって、町、漁協、商工会、観光協会、それから漁具製造業者、このような団体が連携して活動をしています。我々の活動を広く知ってもらうために取り組んだのが、ブランド化事業です。はっきり申しますと、カツオというのは四国の海であるとか、銚子沖、あるいはこの和歌山で獲れるカツオに、ほとんど差は無いと思います。私どもが取り組みましたのは、漁法です。

先ほど言われましたケンケン漁、あるいは一本釣り、まき網、この漁法の違いによって鮮度が違うやろうという、これを重点的にして取り組んでまいりました。私どものカツオは、タタキではなくお刺身。高級魚のイメージを持って取り組みを始めてまいります。

このように、先ほどケンケン漁のことについて説明がありましたけれども、こういった漁法がその後改良に改良を加えられまして、ケンケン漁の場合カツオは一本、一本非常に大切に扱われます。それから生き〆、血抜き等、鮮度保持について技術を駆使しまして作り上げた、日本一おいしいカツオではないかと思えます。





このブランド化への取り組み事業はいろいろな計画をしまして、平成14年3月1日に名古屋で「ほんまもん和歌山」というパーティーを開催しました。名古屋方面のマスコミ関係者160名を招待して、関係者を入れて250名のパーティーです。この席上で、勝浦からはキハダマグロ、それから白浜からはクエ、加太の鯛、私どものカツオとこの四つが提供されました。当時の県知事とJR東海の社長もいらっしやっ

ていて、すさみのカツオですと差し入れましたところ、これはうまいということで、250名分のお刺身があつという間になくなってしまって、うれしい出来事でした。

これは地元でもということで、3月3日に当時の町長を迎えまして、キックオフセレモニーを開催しました。カツオの解体ショーとか、他にもミニ講演として、ケンケンカツオは何故うまいのか、こういったイベントも行いました。当日にはマスコミが7社、テレビ、新聞、ラジオ等の取材も入りまして、盛大に開催をされました。ところが、こういった流れも漁業関係者、あ



るいは仲買業者の中には、やはりいろいろと思う方もございまして、当時のテレビインタビューで、地元の仲買人さんが「こんなもん、やってもやらんでも一緒やろ」と、こういう声がございました。私は「そんなのほっとくと、そのうち良さが分かるやろ」と、そういう一幕もございました。

翌月、4月14日に初めてポスターとシール等ができあがりまして、初めての出荷の日を迎えました。この時のこのシール、我々ブランド委員会を立ち上げたのが2月で、その当時はまだ予算も全然ありません。町や県へ根回しをしまして、6月の補正予算で何とかということで、印刷業者にそういうお話をしてできたシールです。そうやって非常に苦労してできたシールなんですけど、出荷時、業者がシールを貼ってくれないんです。当時、業者が6社ございまして、何とかお願いをして、1社だけ協力いただけることになりまして、何とかマスコミへの





面子が保てたということもございます。

そういうこともありまして、我々はもうこれは地元ではちょっと難しいんじゃないかと。だから、地元よりもまずマスコミ攻勢をしようということで、プレスリリースを徹底して流しました。その結果、多数のマスコミ関係者が取材に見えられまして、実際にケンケン漁船に乗って取材をされ、活きメ、血抜き等を撮影されました。これだけではマスコミの方は味が分かりませんから、大体1回来られると5、6



名みえます。その方々に食べた上でいいから、映像でも文章でも入れてくださいということで、全員にカツオを持って帰ってもらいます。そうすると、撮影の1、2週間後にはすごい反響で、関西を中心に名古屋方面でもテレビ放映されました。



予算は非常に厳しいものがございます。14年度で県から60万円、町から40万円、合計100万円です。15年度は県から50万円、町からは20万円です。非常に厳しい予算で運営をしてまいりました。こういう状況でPR活動では何とかやはりマスコミを巻き込もうと、JRすさみ駅でカツオ博物館を開催し



たり、百貨店での試食会あるいは即売等でPRを行った際に、必ずマスコミに取材に来てもらっています。我々の願いでもあります。

一方、地元での理解も必要ということで、地元の中学生を対象にカツオの創作料理教室を開催したり、国道上に補助金40万円を充当しまして作成した大形看板を設置したりしました。



和歌山県の水産振興課から10万円の予算をいただいて、名古屋、橋本の公民館で開催いたしました。当時、女性を中心



に50名に集まってもらったんですが、やはり誰もカツオのお刺身というのを食べたことがないということで、やはり我々はもっとPRが必要かなということで、PRの認識をしたところです。

17年の3月のイベントにはさかなくんに来てもらいまして、「さかなケンケンケンかつおを語る」という講演会等も開催

をいたしました。やはり有名人でございますので、こういったイベントはやはりマスコミ効果、PR効果が非常に大きいです。

カツオのブランド化も徐々に浸透していきますと、「そのカツオはどこで食べられるの」とか「どこで購入できるの」といった声が多くなりました。そこで、関西でケンケンカツオの取り扱い店あるいはその提供店の募集をしまして、関西方面を主にして大体 100 店舗あまり集まりました。



うことでシールなりポスターを呈示することができました。このことが、後のブランドの申請、地域団体商標登録の申請には非常に役立っています。

その後、平成 18 年に取り組んだ事業について。当時、私どもはすさみ町から 10 万円の補助金をいただいていた。そんな中、議会から「もうブランドになってるからいらんのちゃうか」という声が出始めました。これはやばいということで、他に何かないと探していたところ、商工会の全国支援事業というのを見つけまして取り組んだのが、コラボレーション事業です。

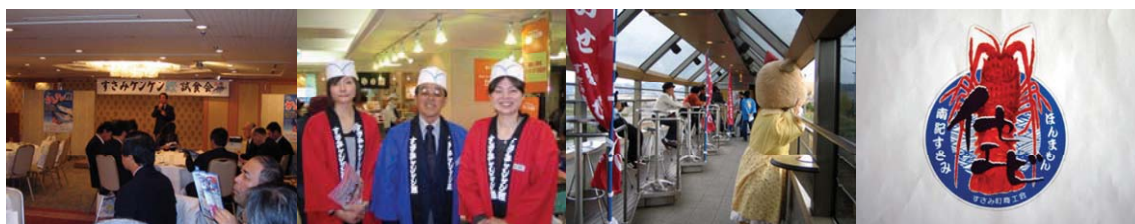
この事業は経産省で 800 万円いただきました。非常に使い勝手も良くて、都会への進出や全国展開等、有効に使うことができました。この事業で、マスコミ関係者ばかりですけれども 40 名ほど集まってもらいまして、名古屋地域で試食会等を開催しました。翌日、テレビや新聞、ラジオ等で一斉に紹介してくれました。非常にPR効果が大きいです。

京都の大丸さんでは、その日獲れたカツオをその日に届けようという、そういうキャンペーンにあわせて試食会をしたところ、やはりお刺身のおいしさにびっくりされてました。

経産省の補助金はカツオだけではなく、伊勢エビにも使うことができるということも

## ケンケンかつお・黒潮の恵み コラボレーション事業

事業項目	事業内容	実施時期	概算費用 (千円)
委員会	ブランド推進など	7月~2月	916
調査	マーケティングなど	7月~2月	740
試作品開発	加工品作り	10月~2月	300
広報展示会	都市部CP、記者クラブ招聘など	9月~2月	5,965
報告書作成	作成費	2月	273
合計			8,194







ありまして、私ども天王寺からすさみ駅まで4両編成の特別列車「伊勢エビ号」というのを走らせてまして、これもやはり非常にマスコミから多くの取材を受けました。それからJR大阪駅や寝屋川市でも伊勢エビのキャンペーンをやりまして。PRの結果、伊勢エビを食する方が従来の3倍に増えています。

平成18年10月に、三度目の申請なんですけど、地域団体商標登録として認定をされました。同じ18年ですが、地域活性化センターが全国の地域活性化ビデオを作るからということで、その取材先として三か所が選ばれてまして、秋田県の比内地鶏、静岡の富士宮やきそば、私どものケンケンカツオが選ばれて、DVD化されました。全国の3,000余りの自治体と関係機関に配布されてまして、これも非常にPR効果が大きかったと思います。

こうしたブランド化には、やはりなんといっても品質保持というのが命です。昨年は大地震等で中止になりましたが、ケンケン祭りというのをずっと継続してやってきております。今回、祭りとしては5回目なんですけど、取り組んでちょうど10年になります。3月18日にまたカツオ祭りを行います。こういったPR活動には非常に費用もいりますから、補助金をいくつか探しております。



平成20年度は宝くじ長寿社会作り事業とで100万円、21年度は70万円、去年は中止で、今年23年度は田辺広域から60万円と、あちこちから補助金を探して何とかやりくりしております。いろいろ積み重ねて、今年も3千人余りの来場が見込まれます。簡単でございましたけれども、ご静聴ありがとうございました。

武田：どうもありがとうございました。ご苦労が非常に伝わってくる例でございました。

次に串本町のしょらさん鯉について、吉村さんお願いしたいと思います。



## 第1部 話題提供

### 和歌山カツオのブランド化をめざして 「しよらさん鰹」の取り組み

吉村 健三  
(和歌山東漁協・理事)



ただいま紹介をいただきました、吉村でございます。僕こんなことやるの初めてなんで、すさみさんのようにうまく説明できないかもしれません。実は、串本で揚がるカツオはどうしてもすさみさんに負けていて、宣伝面でもすさみさんに遠くかけ離れておりまして、やっぱりブランド化せないかん、こういうことで取り組みをはじめました。

最初、すさみさんのほうへ「ケンケン鰹のネーミングを使わせてもらえんかな」とお話に行ったんですが、断られまして。「ありや、これはあかん」と。今日は一緒に参加してます、寺本理事と理事会に「それでは『しよらさん鰹』どうかな？」と提案をしたんですが、理事会のほうではあまりピンと来なかったらしくて、当時あまり取り上げてもらえなかったんです。串本町の水産振興会から「一度ブランド化をしないか」と提案いただいて、理事会と一緒に協議した結果、僕が言った「『しよらさん鰹』はどうですか？」となりました。「しよらさんって何ですか？」と質問があつて、「しよらさんと言うたら、串本節の一節に出てくるんですよ。愛しい人やとか、うちの大事な人という意味なんですよ」と。「それはいいね」と、串本の水産振興会が力を入れてくれまして、ラベルができあがりました。



その後、近鉄の北花田のジャスコに、イオンですか、行って三日ぐらいキャンペーンをやりました。僕がうろうろするもんで、売り子の女の子に「係長、ここ来たらあかん、あんたが来たら売れへん」とか言われました。その時は天候が悪くて、ものすごく高い仕入れで大赤字をした経験がございます。



私どものしよらさん鰹というのは、ケンケンで漁獲したものだけをしよらさん鰹として扱っています。それも2キロ以上、すさみさんを追い越さんといけないからということで、大きさを2キロ以上、4.5キロ以下と限定したんです。当日ものでなければ駄目ですよと。



すさみさんでも当日もんでないというの是一緒なんです、そのぐらい厳選してやっています。

千葉の幕張で開催されたフードデックスジャパンというフードショーにも参加させていただきましたが、すさみさんのようには、串本のしよらさん鰹という名前がなかなか伝わらなかったです。

去年か一昨年だったと思うんですが、お客様が串本の駅前の料理屋へ行って、ケンケン鰹をくれて言うんですね。すさみのケンケン鰹を串本駅で言われる。「これはちょっとおかしい」とうちの寺本理事が憤慨しておりました。「これは大変や、宣伝力のなさや」ということなので、私どもは平成20年に漁協合併してから、こういう宣伝の取り組みも薄れているように思います。すさみさんに追いつかないといけないので、まだまだ頑張りたいと思います。つたない話で誠に申し訳ないんですが、これで終わらせていただきます。ありがとうございます。

武田：吉村さん、どうもありがとうございました。吉村さんも非常に苦労されてるようです。よく分かりました。一部についてはこれで終わりたいと思います。



## 第2部 パネル討論

### カツオ漁の今を考える

**二平：** よろしいですか。それでは席に着いていただいて、始めたいと思います。プログラムの裏がパネル討論のページになっています。「カツオ漁の今を考える」ということで、私が司会進行をさせていただきます。皆さん、あまり緊張しないでください。気楽にやりたいと思います。それでは、今日お並びいただいた皆さんに、簡単に自己紹介をしていただければと思います。特に船頭さんたちには、どのぐらい昔から、何歳の頃から船に乗られて、どんな漁をされているかということなどを中心に紹介していただきたいと思います。長野さんからよろしくお願いします。

**長野：** 昭和15年生まれだから、中学をあがった時は30年、それから今71歳で、結局51年やってるのかな。病気もせずずっと健康でやってきました。この50年の中で、トータルで25年間は県外におったということです。日本国内、津々浦々、カツオのある港を追っかけて、いろいろと回ってきました。よろしくお願いします。

**二平：** ありがとうございます。後からいっぱいお話を伺うことになっています。寺本さんよろしくお願いします。

**寺本：** 串本町の寺本でございます。皆さんから見ると、かなり年やなというて、何はなくても年だけは一人前だなと。自慢をするわけにはいきませんが、私は今年73歳でございます。振り返ってみますと、50年、これしかない、漁師しか知らずに50年やってきました。以上です。

**二平：** 長野さんも寺本さんも大変有名な漁師さんで、全国を駆け巡って漁をされている方です。それから今度は鈴木さんです。遠く千葉県勝浦から駆けつけていただきました。

**鈴木：** 千葉の勝浦から来た天松丸と申します。今日は自分が尊敬している大洋丸の長野さん、それと安崎丸の寺本さんと一緒に感激しています。大洋丸さんは自分も漁師になって42年になりますけど、20代、30代、ずっと。和歌山の人というのは、ひき縄の先生、千葉の漁業者の先生なんです。だからどうしても先生にあこがれるということで、大洋丸さんはあこがれの人です。自分は今日ここに呼んでもらって、大洋丸さんに会えて本当にうれしい、本当に良かったです。安崎丸さんのほうは、自分のところの吉丸という船が、よくマグロ漁の行き帰りに勝浦に寄っては、安崎丸さんにいろんな話を聞いていると言っておられました。そういう面で、自分のあ



こがれの二人に今日は会えて、本当にうれしいです。よろしくお願いします。

**二平：** 鈴木さんはお隣の先生役の二人の船頭さんに会えて感激されています。実は昨日パネラーの船頭さんに集まって頂いて前夜祭をやって飲んだんですが、とても楽しく語り合いました。ありがとうございます。地元を代表して、杉本さん、よろしくお願いします。

**杉本：** 杉本です。漁師を始めた16歳から50年弱、47、8年やっております。地元では今ほとんどカツオをやっております。よろしくお願いします。

**二平：** 後から潮岬の目の前のカツオについていろいろ教えていただこうと思っています。それではこちらのテーブルに来て、細井さんです。細井さんは、船頭さんではありません。船頭さんたちが獲ったカツオを、鰹節の間屋さんとして広めている方です。よろしくお願いします。

**細井：** 今ご紹介をうけました細井です。今日は、社団法人日本鰹節協会専務理事ということでお伺いしておりますが、いわゆる消費地での鰹節屋です。今の時代ですから、鰹節そのものを売るというよりも、鰹節を仕入れて削り節にして販売しているのが実態です。たまたま昨年1月8日ですけれども、高知県の黒潮町で日本カツオ学会が発足したんですが、その会に私がお伺いしまして、それで二平先生のお話を聞いて、いろんなことに目覚めたというわけです。私のバイブルにしているんですが、今日も皆さんの資料の中に入っていると思います。この二平先生が書かれた「カツオの回遊生態と資源」（月刊『水産振興』）、これを読ませていただいて、我々鰹節屋もカツオの資源問題はちょっと真剣に取り組まなければいけないと思っている次第です。よろしくお願いします。

**二平：** 次が一番若い方です。御所さん。地元でカツオの研究をされています。

**御所：** 水産試験場の御所と申します。皆さん古さをアピールされておりますが、何よりも私が古いことを証明いたします。古事記の冒頭をご存じでしょうか。「豊葦原瑞穂國」私の名前の「豊」もここから引用されております。誰よりも長生きであることを証明させていただきたいと思います。それは前置きとしまして、カツオを研究して5年ぐらいになりますが、今分かっていることに関して資源的なことの質問がありましたら答えたいと思います。よろしくお願いします。

## 第2部 パネル討論

### 問題提起

#### 黒潮源流域のカツオの減少とひき縄漁

### 二平 章

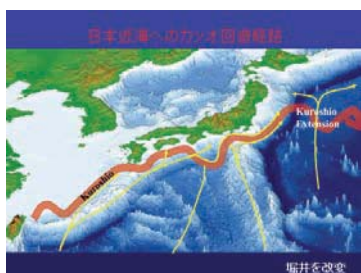
(茨城大学地域総合研究所・漁業情報サービスセンター)



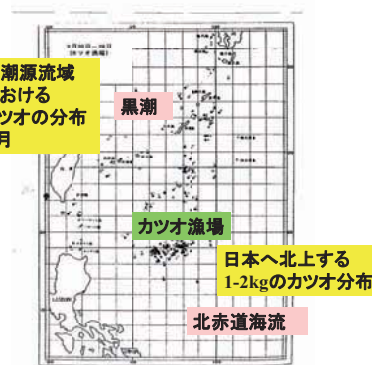
ありがとうございます。私もカツオを研究して、36、7年になります。まだ船頭さんたちの50年には及ばないですが、船頭さんにいろいろなことを教わりながら、カツオを追いかける仕事をしています。それでは、皆さんからお話を伺う前に、少しだけ今のカツオ問題がどういうところにあるのかということ、パワーポイントでご説明します。

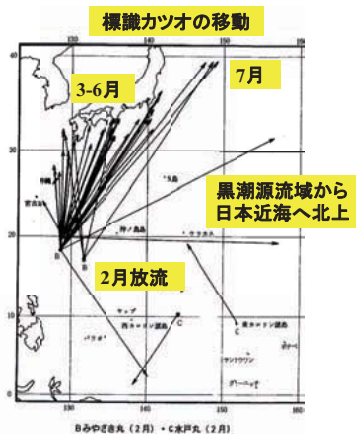
今、私がどんなことを考えているのか。どんなことを訴えているのかということ、分かりやすくご説明します。これは、16年前、平成8年にカツオ資源に黄色信号がともってますよと、お隣の三重県で私がお話をしたときの新聞です。当時はカツオなんて資源問題なんか無いと言われていた時です。新聞記者さんが書いたタイトルなので、見出しは大きいのですが、大乱獲が遠い要因としてあるのではないかとということが、この食料新聞に報道されました。

カツオは、日本に近づいて来る時に、いくつかの通り道があります。そのうち、紀州に一番関係が深いのが、黒潮ルートで、フィリピンや台湾方面から

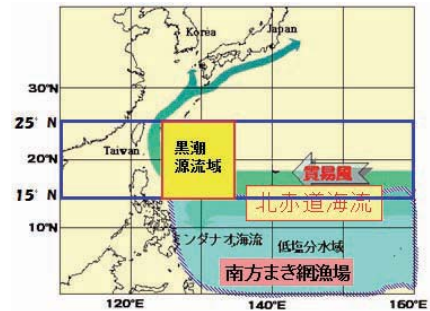


から来遊してきて、土佐沖や潮岬沖に現れるカツオです。船頭さんたちにお聞きしても、やはり西から来るのが7割ぐらいではないかとおっしゃっていました。紀州の南からそのまま北上してくるルートもあるようです。それから、伊豆小笠原諸島伝いに上がってきて、三陸のカツオとなっています。ですから、春のカツオは主に西側ルートから来ると考えてよいでしょう。2月、ちょうど今ぐらいの時期に台湾とフィリピンの沖あたり、鹿児島からまっすぐ島伝いに南に下がったあたりが、昔のカツオの漁場でした。ここに1キロから2キロのカツオが昔分布をしまして、船はまっすぐ南を向いて航海し、いつもカ



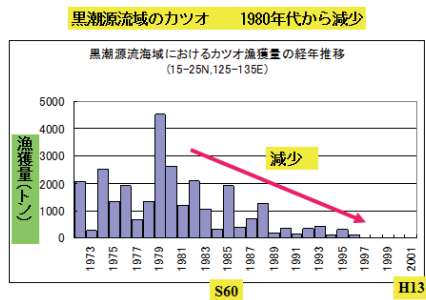


ツオを釣っていました。黒潮の源流域にあたる北緯 15～25 度あたりにカツオ漁場がありました。この漁場のカツオが北に上がって来るわけです。2月にここの北緯 20 度よりも南のところで、調査船で標識放流します。そうすると、黒潮伝いに3月から6月に四国から紀州沖で獲れるんです。ですから、安崎丸さんや大洋丸さんが釣られるカツオというのは、2 月頃黒潮源流域にいて、3 月頃から5月になると紀州沖に来て、夏にはその一部が東北に入るとい



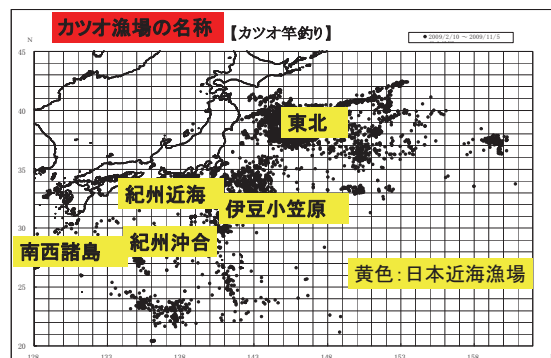
う回遊をしていたのです。

黒潮源流域に昔はカツオの竿釣り船がいっぱい行っていたのですが、ここのカツオがどうなっているか、漁獲統計で見ると、1970 年代から 80 年代の初めぐらいは、年によって変動はありますが、ずっと獲れていました。ところが 80 年代の半ばぐらいから、魚が見えなくなり、魚



が見えなくなれば船は行きませんので、今はまったく漁場がない状況です。船は皆もっと東のマリアナ海域に出てしまいます。ですから今、黒潮源流域の漁獲はほとんどゼロです。漁場ごとにカツオの漁獲量の経年変化をみてみましょう。これは宮崎県油津のひき縄船の漁獲量です。昭和 60 年代初めまでは、変動がありながらも結構漁獲があったのですが、昭和 62 年ぐらいを境にして、低調になってきて、平成

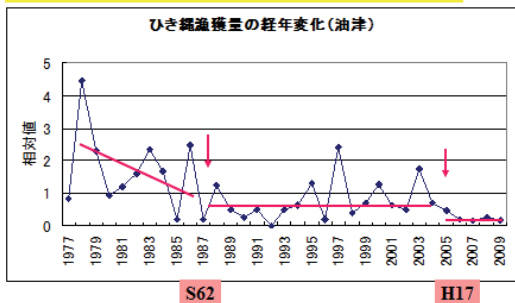
17 年から全然駄目という流れになっています。この後の図は近海の 20 トン以上の中型竿釣りの漁獲量です。矢印は漁獲量の変化点の年を書いています。これは南西諸島です。平成 2 年、平成 13 年頃から漁獲レベルがぐっと悪くなっています。これは紀州の沖合です。黒潮を乗り越えて、もっと南へ下りた、沖合のほうです。これは竿釣り船の統計ですが、平成 3 年ぐらいまでは、でこぼこしながらも結構良い漁をしていた年があったのですが、誰が見ても分かるとおり、平成 3 年からがくっと落ちて、良い年がなくなってしまい、更に平成 15 年からもう一段階悪くなっています。ですから、ほとんど竿の漁場が形成されなくなってきたということです。次は紀州の近海です。潮御崎寄りのほうです。これは昭和 57 年ぐらいから変化しているように見えます。それが



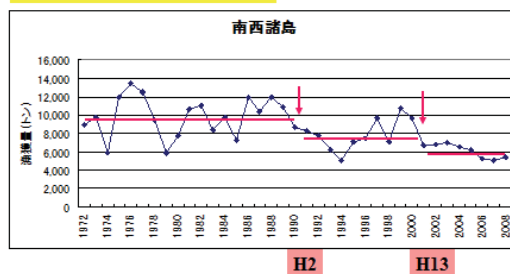


ら徐々に悪くなって、平成 13 年あたりから本当に低位です。こういう状況が紀州の近海と沖合で起こっています。

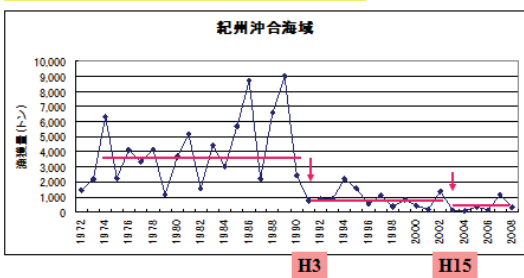
宮崎県ひき縄漁獲量  
S62年から減少、H17年以降、さらに減少



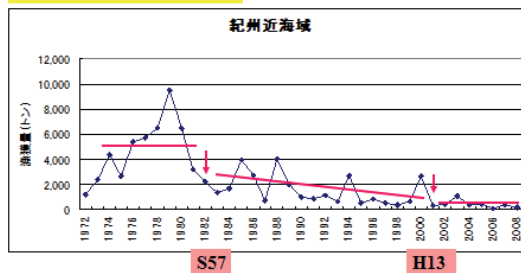
南西諸島水域の竿釣り漁獲量  
H2年から減少  
H13年以降低迷



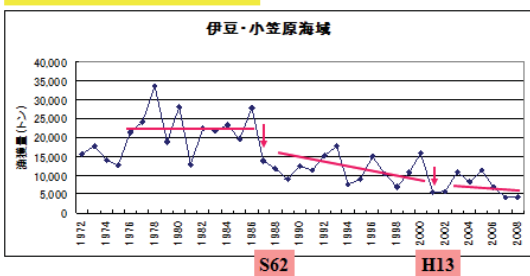
紀州沖合  
H3年から激減、H15年からさらに減少



紀州近海  
S57年から減少  
H13年から低迷



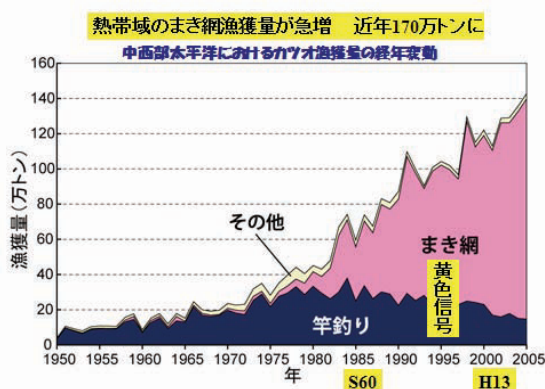
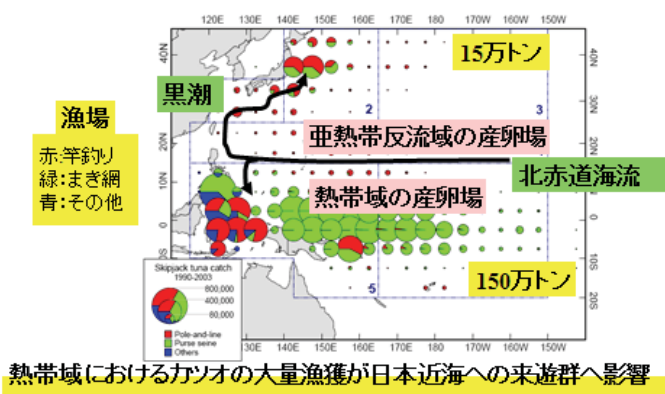
伊豆・小笠原海域  
S62年から減少  
H13年からさらに減少



次は伊豆・小笠原です。伊豆・小笠原の海域はまだ良いと言われていたのですが、やはり昭和 62 年ぐらいからぐっと落ちて、平成 13 年ぐらいから本当に低い状況です。小笠原・伊豆列島線を通して島伝いに北上して来るカツオの方も、同じように悪くなってきているとみてよいでしょう。おそらく昭和 60 年前後を第 1 の境目、平成 13 年頃を第 2 の境目として、カツオの来遊資源

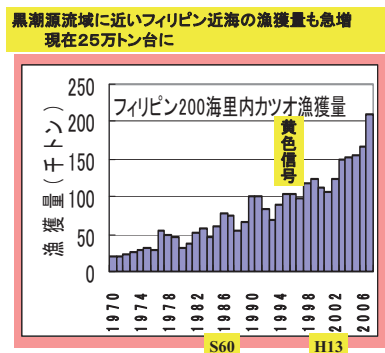
が悪いほうに変化をしたというのが、私の意見です。ではどうしてこのような現象を起こしているのかということです。次の図は西部太平洋のどこでカツオを獲っているかという図です。この丸の大きさがカツオの漁獲量です。緑が巻き網です。大きな巻き網船が獲っています。赤が竿釣りです。青はその他です。日本近海と南の赤道域の丸の大きさの違いを見てください。黒い線が北赤道海流と黒潮の流れです。日本近海では大体 15 万トンくらいで、熱帯域で 150 万トンぐらい獲っているのがカツオの漁獲の現状です。

次の図を見てください。西部熱帯域のまき網の漁獲量が昭和60年ぐらいからどんどん増えていっています。私が黄色信号ですよと言ったのは、この時期です。先ほど言った昭和60年と平成13年からどうなっているかが、日本近海でカツオ漁獲が減少した昭和60年と平成13年がこの位置になります。



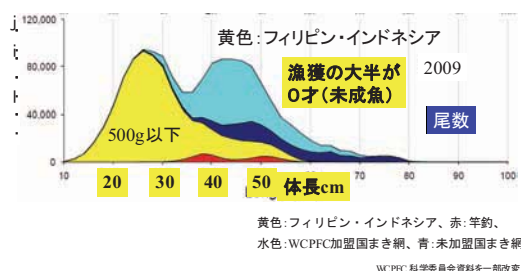
私が黄色信号を出した時には、西部太平洋で漁獲量が100万トンに達した時です。この時に黄色信号がともしだしているから、注意したほうがいいと言って、今はこれが、170万トンぐらいになっています。ですからこの後も、カツオ漁獲は続いて増えてきたということになります。

次にこれがフィリピン近海の漁獲量の図です。現在25万トンになっています。これは2006年で切れています。私が黄色信号を出した時は、フィリピンで10万トンぐらいでした。最近では25万トンに達しています。ですから日本の近海よりもはるかに多く漁獲しているということになります。これが南のほうのカツオの獲れ方です。それでは、



どんなカツオを獲っているのかということ。上の図の重量分布図よりは下の1尾1尾の長さの分布図をよく見てください。このような尾数として獲っていますということです。黄色い部分がフィリピンとインドネシアが漁獲しているカツオです。20~30センチのカツオをたくさん漁獲しているのが分かります。20センチというと、僕の手のひらの大きさです。頭の前からしっぽの切り込んだところまでの長さをカツオは測ります。20センチというとサバより小さいですね。30センチというと、やっとサバやソウダカツオ

### 中西部太平洋におけるカツオの体長別漁獲尾数



の大きさです。40センチを超えないと刺身商材にはならないはずですが、ただこういうカツオをたくさんとっているという現実があるのです。カツオは卵を産み始めるのは、大体45センチぐらいからです。カツオは42～43センチで1歳ですので、0歳の、まだ一度も卵を産まないカツオを、これだけの尾数獲っているということです。先ほどのフィリピンで25万トンに増えてきた中身が0歳のカツオであるということです。ですから、獲り方としては、あまり良いことではないと思います。

今、国際会議（WCPFC）の中で、毎年どんな見解を出しているかという、2008年報告でも、資源は潤沢、資源に問題なし、その前からずっと問題なしと言っています。2009年に日本近海が大不漁になります。それでも、2010年、2011年の報告では、基本的には獲りすぎではない、高位安定だと報告しています。今の国際会議の見解です。ですから、まだ漁獲量をコントロールするようなことはされていません。私は国際会議上での資源計算の仕方に問題があると思っています。おそらく計算のやり方の精度が高まってくると、この見解はちょっとおかしかったなという反省する時がそのうち来るとしています。後からまた少し議論していただきたいんですが、沿岸のひき縄とか釣り漁業というのは、地域の暮らしや経済を支える漁業です。家族でやっている漁業、これは地域を一番支えている漁業です。資源と環境に優しいのもこういう漁業です。地域経済との視点でも、こういう漁業こそ守らなくてはいけないのではないかというのが私の考えです。それから、やはり黒潮源流域のカツオ資源を増やさないと、高知沖や紀州沖にカツオは来ないのです。源流域のカツオがからっぽになってしまうのは、日本沿岸の小さな船にとって困ることがあります。ですから、また議論いただきますが、やはりこういう意味で資源を大切にしたいほうがいいという錦の御旗の下で、いろいろな団体、地域が手をつないで、国や国際会議を動かしていくことが大事だというのが、私の考えです。あとはひき縄の現場を御所さんからお話していただきたいと思います。

### 中西部太平洋国際漁業委員会 (WCPFC) 科学者委員会の見解

2008年報告 資源は潤沢・資源に問題なし  
2009年: 日本近海大不漁  
2010年報告 過剰漁獲・乱獲ではない  
2011年報告 過剰漁獲・乱獲ではない  
高位・安定  
2011/2012年: ひき縄不漁  
WCPFCの資源計算・算出法に問題あり?





## パネル討論

御所： カツオ漁の動向ということで、この場にカツオ漁にあまり普段関わっておられない方もおられるかと思いますが、船頭さんたちのお話の前の、基礎知識的な意味で聞いていただけたらと思います。



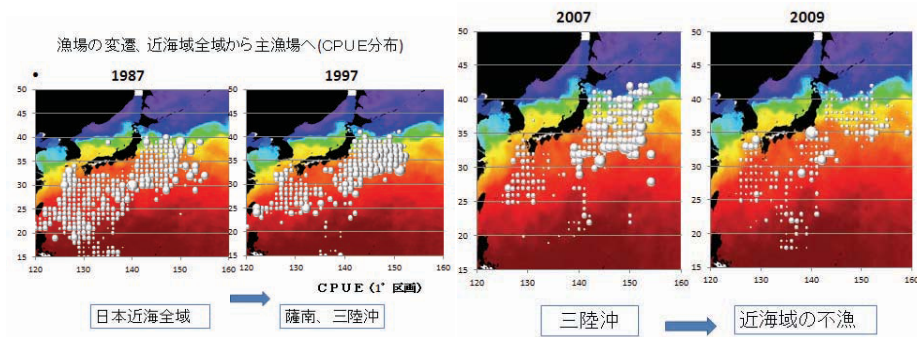
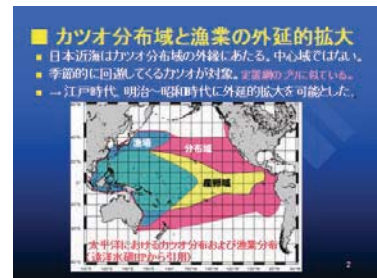
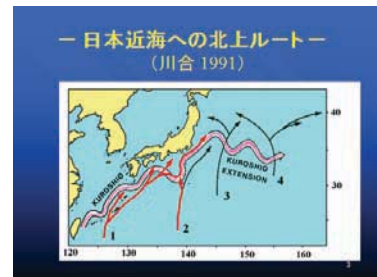
向こうに見えるのが潮岬ですが、その前で操業しているこれが今から話題になるケンケン、沿岸でカツオをひいて獲る漁です。竿を横に張り出したり、縦に立てたりして縄を引っ張って、先ほど朝本さんのお話にもあったように、潜行板や疑似餌でカツ



オを釣っています。

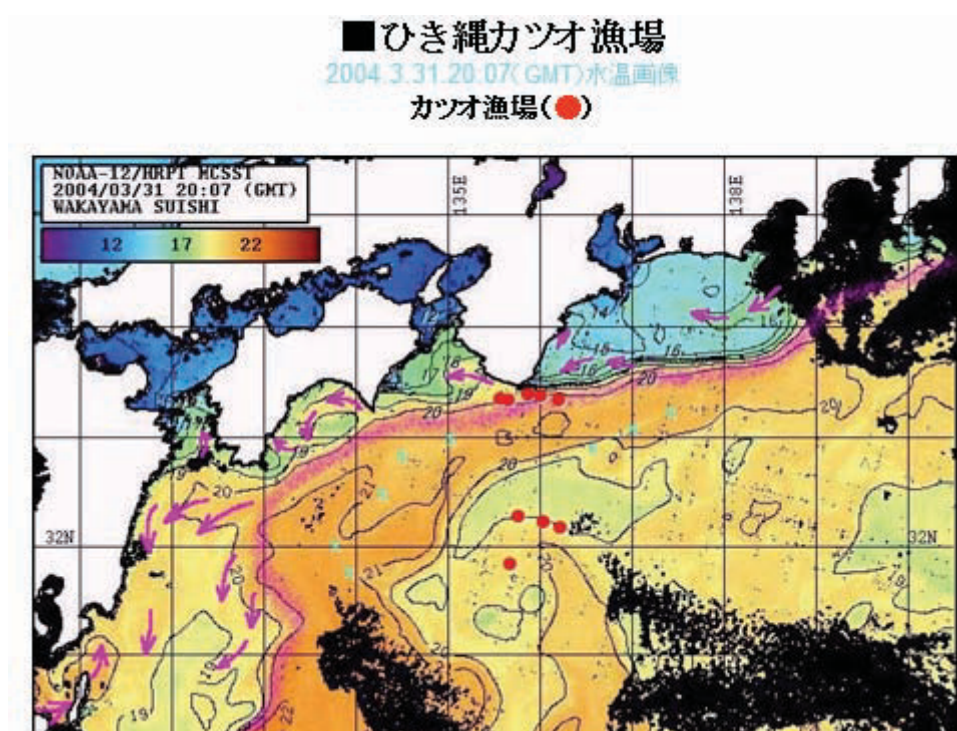
先ほど二平さんのお話にもありましたが、カツオは太平洋、大西洋、インド洋など、世界的に分布している、世界の中でもものすごい量が獲られている代表的な魚です。熱帯の産卵域から日本近海の漁場まで、このように広い分布があります。

日本近海には、南のほうから4本のルートでカツオが上ってきます。それに沿って竿釣りが操業しているというお話がありましたが、その竿釣りの操業の情報から、先ほどの図を水温分布が熱いほど赤く、冷たいほど青くしてあって、宮崎県の東さんが分析されたんですが、これは竿釣り漁場の場所ごとのカツオが獲れた量をバブルの大きさに表しています。



これは、この辺りが源流域と先ほど二平さんが言っていました、1987年当時は、源流域あたりでも漁獲があって、ルート上、東北の餌を獲る場所に至るまで、ほと

んどの場所でカツオが大変獲れています。それが 10 年後の 1997 年になりますと、竿釣り漁場の南がなくなって、この薩南海域と東北にちょっとずつ集約してきておられます。更に 2007 年、10 年経ったら、ほとんど南のほうは操業も漁もなくなって、小笠原、伊豆の辺と三陸のみになってきます。そして、先ほど 2009 年大不漁と言われた年なんですけど、ひき縄もなかった話が後から出ると思いますが、この近辺、周りもほとんどなくなって、ポイント的にこのあたりで獲れたのみです。このように竿釣り漁業の情報を聞きましても、カツオが非常に少なくなってきているということが見て分かると思います。



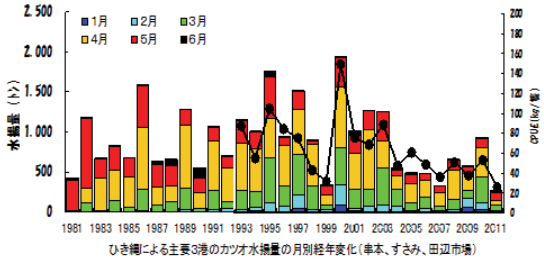
ここでちょっと話が変わって、船頭さんたちのお話に出てくる、この和歌山近辺でどのようにカツオを獲っているかという場所の話です。これは見慣れない方はなじみが薄いと思いますが、人工衛星から撮影した海面の様子です。この白いのが陸地で、これは四国です。足摺、室戸岬、これが潮岬、このへんが田辺、和歌山、こっちが三重です。この赤い暖色系が暖かい水、これが俗に言う黒潮の流れです。ピンクでなぞってあります。そして青いところが低い水温になります。カツオの獲れた場所は、この濃い赤い丸で示していますが、カツオがどのあたりで獲れるかと言いますと、水温さえあれば獲れるという話も出てくるかと思いますが、大体 20℃前後のところの、この黒潮の北側、それから春の初めには、先ほど上ってくるルートと言いましたが、その南側、黒潮よりも低いところの水温でも獲れたりします。ひき縄でも獲れる場所です。同じように、違う日の水温分布図と漁場ですが、このように北側でもあって、南側でもあった日があります。これは北側でのみたくさん獲れ

ていた時です。さらにこのように黒潮が変な形に曲がったりもするのですが、その時も温かい水が入ってきて、紀伊半島の近くに来たところでカツオがたくさんとれています。このように大きく黒潮がぶつかって、温かい水が紀伊半島沿いに入った時は、田辺沖、御坊の前ぐらいまでカツオが入って、時々中まで入ることもあります。

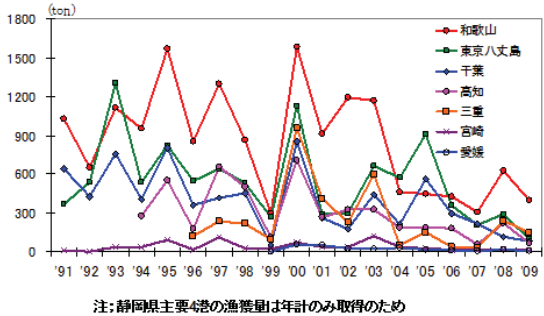
先ほど竿釣りの話ばかりしましたが、これが和歌山県でもメインでカツオを獲っている田辺、すさみ、串本市場のひき縄、ケンケン漁によるカツオ漁獲量を年ごとに、1981年から2011年、去年まで並べたものです。濃い青が1月、水色が2月、緑が3月、黄色が4月、赤が5月、6月が黒と、春を代表しています。このように見ていただくと、昔は旬が4月、5月、あるいは3月から獲れたのですが、近年になりますと、特に一番悪かったのがこの2011年です。3月と4月は特に、今まで100トンを超えたことはなかったのですが、60トンぐらいしか獲れず、本当に異常とも言えるぐらいカツオがいない年となりました。春がメインで、だんだん減って、今年が一番少なかったというのが現状です。

これが最後になりますが、他の県はどうか見てみますと、この赤が和歌山、他に東京の八丈島を緑で表しています。そして千葉県がブルー、続いて高知県はピンク、三重県オレンジ、あと宮崎県さん、愛媛県さんはちょっと量が少ないですが、下の

**和歌山県主要3港（田辺、すさみ、串本市場）のひき縄によるカツオ漁獲量**



**太平洋沿岸7都県のひき縄によるカツオ漁獲量（3～5月）の年変動**



紫とブルーです。どこの県でも変動はあるのですが、この2004年、5年、年が経つごとに、近年たくさん獲れる年が出て来なくなり、平均すると、近年は非常に少なくなっているというのが現状です。以上で近海の話と、資源の話を終わります。

二平： ありがとうございます。研究者の皆さんがよく議論をしている話は分かっていただけだと思います。それではまた

元の席に戻っていただきまして、漁獲統計だけではなく、実際に船頭さんたちが沖へ船を出していて、どのような変化が起こっていると感じておられるのかを話をさせていただきたいと思います。長野さん、お願いします。

長野： ねえ先生。僕は並んでいる順番が4番だから、後からの方がだいぶ落ち着きます



のですがね。いろいろ言われると弱っちゃうな。

二平： 一番声が大きい人から話してもらおうかなと思って（笑）

長野： 何を話してええかな。50年間、さっきも言ったように、春と秋、3か月ずつカツオばかりを追っかけて、50年間中の25年は県外におったというような仕事をしてきました。そんだけ働いてきたらだいぶ楽になったかという、何にも楽になりません。そういうわけなんです、しゃべるのはあまり商売じゃないんで、書いたものを読ませていただきます。

昭和40年代頃、僕が30歳頃じゃないかと思うけど、木船の35馬力で、伊豆沖でカツオ漁をし、ちょっと獲れたのでいつも下田へ揚げるんですが、その時は焼津港に水揚げに行った折り、既に遠洋巻き網が水揚げをしておりました。10キロ前後のカツオが主体ですが、中に子どものカツオも交じっている。それを見た先輩が、「おい、大洋丸、こんなことを南方でやってりゃ我々一代で魚が持たんぞ」と言ったことを、未だに鮮明に覚えております。今はその通りになったと思います。その人はまだ船をやっておりますが、我々のレベルの漁師がおおよそその先が見えるのに、それから約40年間たいした対策もなしでやってきた水産行政に首をかしげざるを得ないと。僕の感覚では日本の東方沖でいくらかカツオが残っているようだが、我々の紀伊半島沖には、さっき二平先生が鮮明に教えてくれましたが、南からの「南魚群」あるいは黒潮系の「南西魚群」は、自分の感覚では2、3割しかここ数年来ないような気がします。とにかくカツオが近海で獲れなくなっています。油の値段が高いのもあり、非常に苦しい状態で、なんとかならないものかと思っております。今回、わたくしのような高齢者がこの会に参加しましたが、そこでもっと若い者がこの運動に参加して、頻りに横の連携を取りながら活動をされることを願います。簡単でございますが。



二平： ありがとうございます。それでは寺本さん、昔のカツオの群れと、最近の群れの違いみたいなことをちょっと教えていただけますか。どんなふうにならなくなったか、具体的に群れはどうなっているかとか、その辺りを教えていただけますか。

寺本： 私がカツオを釣りだしてから歴史は浅いんですが、約20年ちょっとぐらいになると思います。その当時は、カツオというのは海にいっぱいおるもんやと思っていました。どこを走っても多いか少ないかはありますが、カツオは釣れました。いつも今頃の時期ですと、黒潮本流を乗り切って、沖側の潮の下がる場所、いわゆる裏

潮と言うらしいんですが、潮の下がる場所へ行くと、もうずっと横に並んでいる船が、みんな無線機がありますから、一斉に釣り出すわけです。そこが一番良い漁場になって、その日いっぱい満船にして帰ってくると。カツオというものは釣れるもんやと思ってました。それがだんだん、だんだん群れが少なくなってって、もう近年になりますと、一つの群れにみんながたかって。私はそういうのが嫌やから、どっかへ逃げてまた別のほうにもあるやろと思ってきつと逃げるんです。しかし、もうしまい、群なし。こういうような状態が今続いています。あまりにも減るスピードが速い。これは10年前に、これはちょっとおかしいなということで、ここにおられる天松丸さんなんかと、東京の水産庁に行って何とかしてくれということ言うた時に、「カツオの資源なんて無くなりますか？」って水産庁の役人に言われました。愕然としたことがあります。彼らは統計を見ながらカツオの資源は大丈夫だと。我々は統計も何も分かりません。ただ、漁師の肌で、あ、少なくなつとるな。これは少ないな。危ないなというのが分かる。何も統計を取ることもせずに、学者でもなしに、一介の漁師が肌で感じ取るんです。ですから、今後は統計を取られるということは非常に大事です。しかし我々浜の漁師が肌で何を感じとるんかなということをお学者先生、それから統計取られる役人の方をお願いをしたいなと。もっと浜で実際にやっておられる人とミーティングをしていただきたいと、こういうふうに思っています。

それからあと一つ。私は今日、非常にショックを受けました。何故かと申しますと、先ほど田並の先輩から講義を受けましたが、ここはひき縄発祥の地なんです。



それを引き継いだ我々が、何もせんと今まで放っておいた。お前ら何しとったんやとしかられたような気がいたします。ですから、この今日の会合を機会に、もっと我々の横の連絡を密にして、働きかける所には働きかける。あるいはこれは国際的な問題になるかもしれませんが、天松丸さんに一生懸命に頑張ってもらって、働きかけるところには、今後はなるべく働きかけていこうと、そういう風にして欲しいなと思います。以上です。

**二平：** それでは、千葉沖でのカツオの群れを、長年見ていてどのように変化をしてきたのかというあたりを、鈴木さんにご紹介していただきたいと思います。

**鈴木：** 千葉ですが、昭和40年、50年代というのは、カツオが来るのは当たり前でした。季節に応じていろんな魚、金目をとったり鯖を釣ったりいろいろやりました。はえ縄もやります。



大体 4 月になると、漁師の人はスカンパーというのは知っていると思います。トモ帆、あれは底ものをやったりするのに使うもので、ケンケンには使わないんです。だからもうカツオが来る前にトモ帆を外し、90%以上はスカンパーを外してカツオ漁のために準備をするという時代がありました。でも最近は、まったく外す船が一隻もなし。というのは、かなり釣る人もいるけど、半分以上は赤字です。自分たちも、やっぱり 40 年代、50 年代、和歌山の人たちにいろいろ教わって、かなりカツオの技術が上がって、千葉もその恩恵は受けたのですが、今自分もカツオに行くと赤字になります。14、5 年前は少なくなるから何とかしようと思いました。しかし、もっと悪くなって、今では商売にならない。カツオをやっても食っていけないから、他の商売をやっているというのが現状です。そういう人もかなり増えています。だから金目の漁をやる船がすごく増えました。でも、やっぱりカツオの漁がないと、全体の将来が見えないというのが一番の現状です。

二平： 杉本さん、串本の周りで魚の群れを追っていて、どんな風なことを最近感じ取られますか？

杉本： 昭和 40 年代から漁師を始めました。小さな木造船で漁師をして、時期になったらカツオが来ました。遠くまで行かなくてもカツオが来て、時期になったらみんな釣って帰ってきました。それから何年間か僕も遠洋の船に乗りました。遠洋の船でも



赤道付近まで行って 1 か月ぐらい航海したら、満船でやっていけました。でもその後 4 年間ぐらい乗る間に、最後のほうは徐々に徐々に、昭和 55 年ぐらいの年には航海日数がだいぶ長くなってきて、45 日とか 50 日近くかかってくる。それから遠洋カツオ船をやめて、家に帰り、今の FRP 船を造って漁師をしたんですけども、家に帰ってきた時はまだまだここにはカツオがたくさんありました。

二平： 家に戻ってきたのは何年ですか？

杉本： 昭和 55 年。

二平： 昭和 50 年代に戻って来られた時にはまだまだ群れはいっぱいあったということですね。

杉本： 昭和 55 年ぐらいにはもう赤道付近はなんぼか、やっぱり日数がかかるようになってきたということは、カツオは少なくなっていたと思います。今やったらそうやっ



たと思うんだけど。それからずっとしてても、FRPを作って静岡の方にまっすぐ走って行って水温さえあれば、カツオがあったんやね。あったけど、最近、平成入る前かな、まだまだ黒潮の南側、東を行って釣って、北側で釣って、ずっと順調ようやってきたんやけども、やっぱり平成に入ってちょっとしてから、徐々にカツオは少なくなりました。最近、特に、沖の裏潮に行ってもカツオがない。沖から入ってくるカツオがないのです。それは僕らもみんなここにいる漁師の人らも実感してると思います。やっぱりこの漁師町はよ、漁師が漁をせなんだら、活気がないですわね。そういうところで、今度の機会に二平先生のような偉い先生が来てくれて、話してくれて、僕も大変勇気付けられたなと思っております。これからもまたよろしくお願いします。

**二平：** 漁法の話をもう少しさせてください。私もこういう活動に携わっているので、なるべく長年漁をされている長老の方から話を聞かせてもらいます。漁協になるべく長く漁をされてきた方を2、3人紹介してくださいとお願いします。その方々と一人ずつ1時間ぐらい時間をずらしてお話を聞かせてもらいます。みんな一緒に来ると、ワーワーとなって、何を言っているのか分からなくなってしまうので、一人ずつお話を伺いすることにしています。実は高知県にもやはりひき縄の方々がおられて、お配りした新聞の記事には高知県の船頭の紹介を書いています。やはり高知県のひき縄の船頭も、昔は黒潮の北へりへ行くまでに、手前のところに群れがぼつぼつあって、北へりまで行かなくても釣ったと。それも内側の方が冷たいので、今ぐらいの時期は少し太めの3キロぐらいの、食べてはおいしいカツオが手前のところの冷たい潮の中にいて、それを釣ったんだよと。千葉県岩和田の組合長さんにも聞いたたら、やっぱり同じことを言っているのは、黒潮のへりまで行かなくても、出て行ったら手前の海に魚が入っていた。それも3キロぐらいの太いやつです。それがまず見えなくなって、そして黒潮のへりに行くと、2キロ台のちょっと小ぶりのカツオが黒潮のところの強い勢力のところのところにいて、そこを釣って支えたようです。手前からどんどん見えなくなって、そして沖へ行くということをやって、千葉は八丈の方へ行ったり、さらに南の島へ行くわけです。そういうふうな状態だというふうに言っていたんですが、こちらの皆さんは、そういう群れの変化というのはどうでしょうか。おそらく皆さんも船を立派にしていって、沖へ沖へと行ったんですよ。その中で漁獲量を稼いでいく中で、漁獲統計だけ見ているとあんまりすぐには下がらなかった。そういうことはどうですか、長野さん。今言ったような経験はありますか？手前から見えなくなって、沖へ沖へ、広げていきながら魚を探して釣っていくという。

**長野：** 土佐も紀州もありません。その通りでございます。土佐の方の言う通りでございます。付け加えることは何もなし。全くその通りです。

二平： やっぱり手前のところからいなくなっていったということですか。

鈴木： 多分昭和の 50 年代とか 60 年代というのは、例えば船でも 3 年とか 5 年で新しい船を造ったり、エンジンなんていうのは、2、3 年乗って、2、3 年、4 年乗ればオーバーホールはしないで新しいエンジンを入れて、どんどん馬力アップで沖のほうへ、沖のほうへという時代だったと思います。かなり行動範囲は早く広がったということが言えます。漁獲アップ。その時はもちろん、お金をかけても釣れるからかけたんだけど、今だと船を造られる人がいないんじゃないですか、業者が。

二平： 昔から、ここの紀州の方々は旅船と言って、どんどん外へ行かれますが、カツオを釣るのは 3 月、4 月、5 月が春の盛漁期ですが、それ以外の時に外へ行くというのは分かりますが、その 3、4、5 の中でもやはりここの先のカツオは見えなくなってくるのがきっかけで、やっぱり八丈のほうへ行くというようなことはやったんですか？

長野： 天松丸さん（鈴木さん）がさっき言われたように、景気の良い、カツオがたくさん獲れる時分でも、とれすぎて 4 月になると安いです。たくさんとれた。それで僕たちは 1 隻で行く場合が多いんだけど、4 月のだいたい半ばから 20 日にかけて、移動するんです。何故かと言えば、まだ三宅島辺りにはまだ魚が見える。三宅島、

八丈の北へ入った時から迎えをうつ形で行くわけ。そうすると値段がこっちの倍ぐらいするんです。東京の近くだから。こっちから東京に行くといったら、一晩延びますから。向こうはその日に行くから。値段をおっかけていくわけだ。以降、それで成果をあげていきました。最近では伊豆諸島を



冷水塊が包むような潮の形、A型かB型か知りませんが、先生がご存じだと思いますが、そういう形になります。そういう形になった時には房州沖に漁があるんです。漁があるといっても、以前の何分の一かでしょうけど、無いなりの漁を追っかけて行くということです。だから 4 月の 20 日前後に八丈島の方を向いて動いて行くのが理想的かなと。何年も失敗ごとをしたくないもんだから、50 年間の間にかなり成功を収めたということ。成功しても金持ちにはなりません（笑）

二平： 皆さんの実感として教えていただきたいのは、先ほどルートはいくつかあると言いましたけれども、減り出した、群れが見えなくなったというその感覚は、西のほうから上がって来る魚のほうが多く群れがなくなったという、そういう感じ方をされていますか？寺本さん、東のほうの魚に比べて、西のほうの魚の比較をしてください。

寺本： これは時期的なものがあります。4月、5月、大体3月の後半から4月5月がこの期の最盛期なんです。この期の最盛期というのは、先ほど言われたように黒潮本流がちょっとぐらい離れていても、港を出たら近くにカツオがおると。小さい戦闘力の無い船でも結構釣れる。おそらく大量には釣れなくても結構釣れると。そういうような漁をしてきたんですが、今はもう戦闘力がなくて、機械も設備が悪かったら皆目釣れないような状態になってきました。ですから、おそらくどうなるんですかな、またソナーとか、いろいろな機械を据えてやろうとする人も出てくると思います。群れが減ったというのは、私一人じゃなくて、みんな実感として持っております。

二平： やはり船頭さんたちの目を見て、群れがどんどん少なくなって、いるべき所にいない、その辺りの変化、その下がり目というのはどのあたりだろうと、実感として感じておられるのでしょうか。漁獲統計上の話ではなくて、肌で感じて、海を見て群れの数が減った、群れが小さくなった、近いところにいなくなった、沖へ行ったというような変わってきたという変化量が、どの時代から感じ取られたかということ、ちょっと教えていただけますでしょうか。杉本さんからお願いします。

杉本： 平成の初めぐらいから徐々に下がってきたと思います。最近では極端に。漁をするのはよ、大体何キロとか、何十キロ、何百キロという単位やけど、去年の漁だったら1日何本という漁でした。

二平： 1日に数本しか獲れない状況だったということですね。

杉本： 両手で運べるぐらいの量が多かった。ただ値が良かったから。食べるのに精一杯ぐらい。そんな量です。

二平： 1日何本かでは、威勢が沸きませんよね。千葉の方はどうですか。どの時期からおかしくなってきたと感じておられるのでしょうか。



**鈴木：** そう言われると自分では思いつかないんです。というのは、千葉の場合必ずカツオ漁期になって、3月になると、水産試験場の人たちが、今年のカツオの漁海況情報というのをやってくれます。今年は潮の流れがA型になるよと。全然蛇行がない、冷水塊がないという時は大体駄目な年です。その代わりに、冷水塊があって、勝浦沖に入ってきたといったら漁場ができます。だから、カツオというのはやっぱり冷水塊のへりに乗って、漁、不漁があるのだなと思っていました。そうしたら、予報が狂ってきた。「外れてもいいから自分が研究したことを思い切って言えよ」みたいなことを自分の前の組合長が研究者に言っていました。

それにしても、だんだん当たらなくなってきました。そしたら、俺なんか「少なくなったんじゃないの？」って言っても、千葉の研究者は、「いや、水産庁の人が、資源はいっぱいありますよ、濃いですよ」と言うのです。なかなか漁師の実感というのと違っちゃってたんです。そうすると、この5、6年ぐらい前から、やっと千葉県県の研究者も、これ少なくなってるかねということを出しました。多分、15、6年ぐらい前から二平さんがカツオの資源、結局日本近海というのはカツオの資源にすれば手足と同じだと。手足の状態がちょっとおかしくなっているっていうのは、カツオの資源がおかしくなっているんじゃないのというようなことを発表したことがあります。自分の考えていることと、二平さんの発表してくれたことが同じだったんです。だから、それは外国で獲っているのが大きな影響をしているのかなと。その時に東京で会議をやったんです。

国というのは、個人では言っても聞いてくれない。だから昔、『漁村』という雑誌の編集長をやられていた方が気をもんでくれて、市町村議員をやっている人で漁業関係者を集めて、ブルーユニオンという組織を作ってくれました。その中から、全国でカツオ漁をやっている人が集まって、伊香保で会議をやりました。国に言おうと。そうすると国は、「あんた方がそう言っても、国の研究者はカツオはいっぱいいるよと言っている」と言うんです。けれど漁業者みんなは少なくなっているよと。まだ15年前だったらみんなカツオで商売になったけど、もう15年たつと、いかにせんあの時と比べてさらに厳しくなっています。だからあのときに二平さんの言っているとおり、本当に真摯に取り組んでくれればおそらくは中国が3千トンクラスの巻き網をやることはなかったと思います。あの時、日本の漁師が言った「危険だよ、カツオが少なくなっているよ」ということを国が認めて、国際会議でそういう議題を出せば、新たに参入する人も、少なくなっているものに投資しないと思います。資源がいっぱいある、いっぱいあると言うからこそ投資をする。やっぱり研究者というのは本当に大事で、資源を評価する上ではすごい責任があると思います。

**二平：** ありがとうございます。寺本さんどうですか？一つの変化というものを肌で感じておられるようなところはありますか。魚がいつの時代から減ってきたと感じてお

られますか。

**寺本：** ちょっと記憶のことですから確かとは言えませんが、大体平成7、8年くらいから急激に下がってきたように思います。平成元年くらいなら、まだ漁があって、次の年は少なかったなという、また翌年あるということだったのですが、もうこの近年は無いのが当たり前というようになってきました。南のフィリピン海域からの資源は減っていますよということは、試験場の竹内先生からもう10年くらい前で



すか、言われました。資源は減っていますよ。ただ、小笠原と三陸のほうは今のところは多少まだ影響は少ないようですねということでしたが、確かにこの沖での操業が終わって、今度は三重県のほうへ行きますと、あれはおそらく静岡、その沖は小笠原の方から入ってきたカツオじゃなかろうかなと私は思うのですが、それはやっぱりある程度の漁はありました。

**二平：** そうすると、やはり西のほうがまず悪くなって、東はまだ少しその時代は魚が来ていたという時期があったわけですね。

長野さん、その辺りの話はどうですか？実際に東のほうへ漁をされていて、しゅっちゅう八丈の方へ行かれていたわけですね。こっちは駄目でも向こうが良かった時期が一時期ありましたか？

**長野：** みたいな感想だと思います。いつ頃かという、先生が一番ご存じじゃないですか。あ、何年からかなって。

**二平：** 私にあんまり惑わされたらいけません（笑）

**長野：** 何年頃から減ったっていうのはそれだけのこと。ただ、今寺本さんも言われたように、私の今の船は平成2年の暮れに造ったんです。平成3年の2月から乗り出したんですけど、その当時は漁はありました。僕は漁があるところに追っかけていくタイプなので。そうですね、1,000万円は下らないと。船もちょっと良くしたものだから。1,500～1,600万円を揚げた年もあったんです。平成10年頃までは大体1,000万円くらい揚げられた。平成10年から12、3年まで。だけど、さっきも誰かがおっしゃったけど、5、6年前、先生のグラフを頭に入れてちょっとしゃべらせてください。何年頃という、聞く人もあやふやになってしまうので。さっきのグラフを見ておられるでしょうから、あの辺からがたんとながった。そして悲壮感が漂ってきた。

千葉県得天松丸さんのところへやっかいになってみんなでやるんだけど、灘へがらん着けてくると、船が多くなるんです。そうすると、安崎丸(寺本さん)さんもそうですけど、船の多いところは好きなタイプじゃない。今、携帯電話でも潮が見えるようになったので、そういう関係でよっしゃ、この人らにこのぐらい釣らせておいて、僕は別の場所でやろうかと。これだけ潮が入ってりゃ絶対にあるって行くんです。ところが、10年前までだったら絶対成功していた潮が入っているのにもかかわらず、この4~5年前から魚がまったく入っていない。潮が入ってから3日経たないとカツオが出て来ない。結局量が激減しているものだから、そういう乗り方は駄目になりました。さっきも寺本さんが言われるように船の固まりでしか釣れない。紀州沖でも房州でも同じです。そういう状態になっている。

二平： それは優秀な船頭さんだから語れるんです。私は近海カツオの一本釣りをする船頭さんたちもよく知っていたのですが、優秀な船頭さんは船の塊のところは嫌うんですよね。自分が潮を読んで、先へ先へ行って、大釣りをして戻ってくる。やっぱり漁場を変えるぐらいの力を持ってるんです。船がかたまっているところから抜け出して行って、一人でも魚を探してくるというのは、これは本当に技量を持った船頭さんなのです。このお二方はベテランで、そういう動きを多分ずっとされてきた。だけど、面白いですよ。そういう技量で絶対にこの潮には魚がいると沖に行って、昔は本当に魚にあたったんですね。だから杉本さん、潮を見るんですよ。

杉本： 冒険もできたんですよ。当たる確率も多かった。

二平： そうでしょうね、確率も高いわけですよ。ところがやっぱり今は潮があってもそこに魚がないという現象が起こっているというところが、深刻な問題ですよ。高知県で聞いた話では、高知県ではブイが設置されていて、足摺何号とか黒潮何号とか入っているんです。最近はそこでしか漁ができないと言っています。普通のなんにもない所を「野っ原(のっばら)」と言って、そういうところで昔は群れがボツボツと浮いていたそうです。けれども、今ではそういうところに群れがまったく見えないものだから、そこは漁場にならない。とにかく今の船頭さんたちはブイを目指して行って、ブイのところまで釣って帰ってくる。そういうように変わってしまった。それでは技量は育たないという話をされていたベテラン船頭さんもいました。若い人たちに魚を探し出す技量、経験が無くなってしまふ。ブイのところに行けばいいんだとなってしまう。それは一つの話としてありました。

それでは一つ視点を変えて、鯉節屋さんの目で見ると、節の世界の中でどんなことが起こっていると感じておられるかを、細井さんをお願いします。



**細井：** 私が鰹節屋になったのが昭和 43 年からです。大学を出たのは 41 年なんです、2 年ほど損保の会社に勤めました。その後、父親が始めた鰹節屋が大変忙しくなったものですから、子どもは私が長男で、あとは妹なので、結局私が跡を継がなければいけないということで、父親の店に入りました。それから以降の経験ですが、やはり皆さんのお話を聞いて納得することがいくつかあります。私が業界に入った頃は、昔から鰹節を使っている方は、私は土佐節でなきや駄目だよとか、伊豆の鰹節じゃないと駄目だということがあったんです。既にもうその頃から私は実はカツオは陸



を泳いでいますよということを冗談交じりに言っていたんです。その意味は、一本釣りは大型船になり、まき網とともに、焼津港にはかなりのカツオが集中して揚げられるようになりました。近海漁がかなり豊富だったので、鰹節の産地は枕崎、山川、焼津が主な製造地となりました。しかし、40 年代の半ばから鹿児島は原料のカツオを獲る一本釣船が減ってしまい、結局焼津からトラックで陸送されるようになりました。

**二平：** 40 年代の半ばですか。

**細井：** はい。その頃大変高度成長期で鰹節も売れていました。特に 40 年代半ば以降削り節パックができて、40 年代から 50 年代半ばぐらいは私らの鰹節業界、削り節業界はかなり良かったんです。その後、ここ 20 年景気が悪くなってからは本当に苦戦しています。特に私が高齢でこういう所へ来て勉強する気になったかというのと、私も東京の組合長を受けて 5 年経つのですが、すると自動的に上部組織の日本鰹節協会専務理事ということを受けて、より産地の製造を考える時間が増えています。やはりそういう方たちの話を聞くと、危機意識を持っています。ただ問題は、一本釣りがほとんど鰹節の原料から消えまして、まき網船のカツオが原料です。これはまだ獲れているから、先ほどのまだ資源はあるよというような、水産庁の脳天気な回答になっているのです。一部の人はかなり危機意識を持っていますが、まき網船で獲ったものが原料供給されていますから、まだ全体としては危機意識は持っていません。私は水産庁や大日本水産会に働きかけて、資源問題をより真剣に考えていただこうと思っています。やはり国を動かすのは国会議員なんです。国会の農水部会で強い発言をしてもらわないといけないので、とにかくまず国会議員の先生方に勉強してもらおうと思っています。

私は自分の商売をしているところが群馬県です。海の無いところで鰹節屋をやっているのが珍しがられます。群馬県にも、昆布やワカメもあります。鰹節もおかしくないでしょと言っています。需要があるわけなので成り立つんです。群馬県で細々

とやっていますが、私はたまたま今日の18日が誕生日で、69歳になりました。もう古希近くなっていますので、いつまでこの状態でどうなるか分かりません。今のうちに頑張っておかないと、私たちの後輩として優秀な方が業界に入っているんですけど、気がついたらカツオは獲れませんよ、無くなりました、鰹節ができなくなりましたという時代がくる可能性があるということを、今日の話聞いて分かりました。

かつて日本は水産王国だったのが、200海里で閉め出されてグンと減りました。イワシが獲れなくなったのも大きく、かつての半分以下に水揚げが落ちています。ですけれども、ここで踏ん張れば、まだ私は何とかかなと思っています。他の産業界では産官学という言葉が随分流行っていますし、是非一つここにお集まりの方、水産業界でも水産職の方、二平先生とか研究されている学者の方、それにやっぱり官を巻き込んで、本当に真剣に取り組まないと、日本の水産業は本当に危ないと思っています。今日本は輸入ができるからまだ間に合っていて、魚も食べられています、マサバが良い例で、多分乱獲だと思いますが、今あまり日本近海では獲れません。スーパーに売っているサバはみんなノルウェー産です。私ら鰹節屋はさば節というの扱っています。これはゴマサバで、獲れているんですが、これも実は大型のサバが最近大変少なくて、私らが欲しい、割鯖節というのは大きい鯖を二つに割って作るのが割り鯖と言うんですが、これはここ数年毎年少ないから高くなって、私らも商売しにくくなっています。ですから、カツオに限らず水産業全体をどうするかを真剣に考えて取り組まないといけないと思っています。

先ほど二平先生のパネルに出たようにカツオの産卵は熱帯海域でおこなわれます。そして成長して、日本近海には豊富な餌を求めて回遊してくると先生の本に書いていらっしやいます。でもフィリピン、インドネシアの沖で0歳魚を獲っているわけです。間で獲っているわけですから、黒潮ルートのカツオが減るのは当たり前でしょうと言うんです。じゃあ日本は手をこまねいていいのかということですが、実はその小さいカツオを鰹節に加工したものが日本に輸入されているという実態があります。これは10年ほど前に私も知りまして、愕然としました。まずそういったものについて気を付けていきたいと思っています。日本は実は今鰹節の消費量の3割ぐらいが輸入カツオの節です。フィリピン、インドネシア、ベトナムにも中国にももう鰹節工場ができています。徐々にそういうところが増えることを、産地である枕崎、山川は危機感を持っています。本当に日本の鰹節製造加工はかなり減りましたが、このまま放置すると、ますます減るのではないかと危機意識を持っています。フィリピン、インドネシアの小さいカツオは、外国に獲るなどとは言えないですが、買わないよということができると思うんです。ですから、今、水産の統計はカツオの輸入のトータルでとっていますが、サイズのものはとっていませんから、まずそこに働きかけて、小さい鰹節は日本は買いませんというスタイルを強烈にアピールし

て、それをふまえて水産庁は海外のカツオを獲っている国とのいろんな交渉にあたってもらいたいと思っています。

二平： ありがとうございます。私も、この話はあまり議論されてこなかった話だと思います。今までのいろいろな方々が、熱帯域で魚を獲りすぎだから近海の竿釣り船が苦しんでいるという話をされました。大きな3,000トン級、2,000トン級もあるようなまき網が熱帯海域で獲っているから悪いんだという議論があったのです。だけど、それを獲るな、制限しろと言っても、結局日本が20センチ、30センチという小さなカツオを原料に輸入している実態があるのでは説得力をもちません。外国の船が悪いと言っているけれど、日本が小型魚を輸入するという実態が背後にあるとすれば、やはりそこに問題があるのだと思います。ここらへんは細井さんからお伺いしたのと、以前枕崎の立派な鰹節屋さんから聞いた話も同じです。こんな小さな節が輸入されていて、あれは粉になるんですか？

細井： だと思います。

二平： 粉になって、だしの粉末になる。それから、ある有名な会社さん、とても良い仕事をされている会社の方にお会いした時もそういう話が出て、実際の小型の節を見せてもらいました。本当は実は今日それを皆さんにスライドで見せようと思ったら、うっかりして忘れてきてしまいました。申し訳なかったです。ソウダカツオの宗田節よりも小さい鰹節でした。



だけど、腹のところにちゃんとカツオの縞模様が入っているんです。こんな節が実際日本に輸入されてくるわけです。それを使っているという背景もあるので、外国の漁業だけ悪いということだけではなく、そういう流通過程全体を含めてもう1回考え直す必要があるかなと思います。20センチ、30センチというカツオが日本の中で大量に揚がっていたらみんなびっくりして資源を大切にしろと言うはずですが、そういうことを国際的にも国内的にもこれから言わないといけないと思います。資源を大切にしようという声に反対する人はきっといません。そのところで今細井さんも言いましたが、そういうものを扱わないで欲しいという声も大切なのだと思います。今日は細井さんに来ていただきました。節の業界さんの中からこういう話を出すという



日本企業が輸入している小型カツオ節



のは、非常に大変なことで、ご苦労されていると思いますが、そういう実態もあるということを知っていただいて大変良かったと思っています。今までのことで、皆さん他に何か言いたいことはありますか？

**御所：** 現場の方々のお話で十分かと思いますが、私も短い研究の中で、標識放流等でひき縄の船に乗せていただいて、お話を伺いつつ、一緒に波にもまれてデッキでカツオに標識を打ったりしています。春って本当に漁があるはずなのに、あわや坊主（何も獲れない）という時があって、最後の終わりの終わりに 2 本釣れて、それに刺して。でも 1 本は中判の「しよらさん」にあたるカツオなので、もったいないから業者さんにどうか市場へ持って行ってくださいと言った経過があります。そういう場面もありつつ、水産庁や独立行政法人の水産研究所に千葉県や東京都の研究者の方と一緒に、現場の話や、向こうの資源評価になる話を聞いたりする席に行くことがあります。現場の声をひき縄漁業の県で反映したいなと思いつつ、なかなか取り上げてもらえない状況が続いています。今、この場にも他の県で研究されている方も来られていますが、力を合わせて、WCPFC というところで、資源評価を世界の研究者が集まってするんですが、そこで科学的に有効だと認められないと、その文言に減っているという英語の言葉が入ってこないという状況らしいです。そこで、この春に、すさみ漁協さんはじめ、中層浮魚礁を利用されている方の記録を使って、資源の減っている状態を、この 8 月に多少アピールすることができました。その英語の文言の中に「問題はないが、日本近海では減っている危機がある」という文章を WCPFC の会合で入れることができたので、少しは行政等を通じて、遅い中でも少しずつ変わってきているなど感じられます。これからもお世話になる方、次世代の方にもお世話になると思うのですが、密に連絡をとりながら資源回復に向けて心していきたいなと強く決断しました。

**細井：** 今ちょっと思い出したのですが、実は鰹節の原料を、先ほど巻き網で獲っていると申しましたが、南方でほとんど獲っていて、脂が少ないから鰹節には向いてるんですが、ここ数年、2009 年の大不漁以降特に目立っているのが、南方の巻き網の脂が多いカツオが獲れて、あまり鰹節には良くない、向かないカツオになっているんです。その原因を質問したんですけど、答えが返ってきませんでした。私の想像なんですが、巻き網の獲る技術が大変進んでいますから、どうもかなり深いところのカツオを巻き上げているんじゃないかと思います。カツオもおそらく表層だけではなくて、餌とかいろいろな関係で底の方に住んでいるカツオもいると思います。当然水温は冷たいですから、ちょっと脂は持っているんじゃないかと思いますが、そんな現象が起きています。

二平：何かこういうことで知見を持っておられる方はいますか。私は日本近海のカツオしか見ていないので、日本近海の変化はもう30年間見ているので、変化が起こっているというのは今日お話しなかった話の他にいっぱい知っていますが、確実に変化は起こっていることだけは確かです。それはやはりカツオの生息域の中で、一番北まで泳いで来る、そこが日本近海なので、資源が小さくなってくると末端域のカツオからおかしくなってくる。これは生物界のイワシでもサバでもそうです。マイワシが減りだした時は、釧路からおかしくなったんです。釧路が無くなってから八戸が無くなって、常磐が無くなって、マイワシが無くなりました。それと同じことなのです。やはり生物というのは、産卵域のところは最後まで残りますが、末端域に泳いで来る群から少なくなっていくので、日本近海のカツオに一番影響が及んでいてと考えています。だから南だけ見ているとあんまり変化がないように見えますけれども、北の方が一番、変化が現れる地域じゃないかと思います。

今日船頭さんたちがお話いただいたような、本当の変化、それ自身が魚の生活の中で起こっているし、もしかしたら細井さんが言うような脂がのりだしているとか、そういう変化がやはり出てくる。それから、枕崎の鯉節屋さんに聞いたら、「二平さん、昔こんな小さなカツオで卵を持ってるやつはいなかったよ」とおっしゃっていました。彼らは節作りでカツオの腹をいっぱい割りますよね。節屋さんは一番魚を見ている方です。そうすると、小さくて卵を持っているようなカツオが目立つようになってきましたよと言っていました。それはどうしてかということ、どんな生き物もそうですが、自分たちの仲間が減ってくると、増やそう、増やそうと努力をするわけです。そうすると、小型魚の中で成熟が早まっていくんです。小さい体で卵を産んでいこうとします。子孫がなくなったら困るということです。このような現象はどんな魚でも出てくることなので、やはりそういう面でもカツオ資源は変化を起こしているのだなど、私は見えています。今、御所さんからお話いただいたように、決してあきらめる必要はありません。今、水研、水試の若手の研究者の方が、一生懸命研究の上で数字を示しながら、国際会議の中でカツオ資源が減っていることを明らかにしようとしています。国際会議の中の評価でやはり資源はおかしくなっている、だから大切にしようという文言が入るように若手研究者の方々が頑張っている、おそらくそういう時代が必ず来ると思います。

それから、昨日、船頭さんたちともお会いして、その時もお話しましたが、カツオという魚は、少し管理をしてあげて大事にしてあげると、すぐ復活をするような力を持った魚の一つでもあります。このままマイワシみたいに減って、なかなか復活しないというような魚ではありません。コントロールしてあげればちゃんと黒潮流路から北上してくるカツオは増えてくるはずで。そういう意味では、資源を大切にしようという国際的な一致を何とか勝ち取っていけばいいかなと思います。これからは国際的な場に船頭さんたちにも出ていっていただいて（笑）長野さんに

はタイあたりでも吠えていただくような、そういう場もこれからは必要になってくるかもしれないと思っています。

大体時間になってきましたが、三鬼さんどうですか、近海竿釣船の皆さんはどのように思われますか。

**三鬼：** 今色々聞かせていただきましたが、私たち一本釣の業界も同じような状況です。今年は漁が良かったから、魚が獲れたんです。25日にグアムで開催されるWCPCFの国際会議に出るんですが、これまではカツオは取り上げてもらえなかったんです。マグロだけでした。でも2年ぐらい前から、世界もマグロのことよりもカツオが減ってるじゃないかということで、カツオに取り組むようになってきました。だから私も行くたびにカツオ資源について言うんです。水産庁も、やっとカツオに腰を上げてくれました。だから今年の25日のグアム島の会議には、カツオの問題がマグロよりも少し多くなるんじゃないかと思っています。もう半分造りましたけど、3千トンの船を外国が造るときも抗議をしたんです。水産庁さんも抗議したけど抗議が少し遅かったんです。造ってからの抗議だったので、ちょっと遅いな、もっと早くしてくれと私たちも訴えております。ケンケン漁の方々が言うように、私たちも



一緒です。いつも東京で水産庁に行ったり、大臣と会ったりいろいろやって、訴えています。「何とかしてくれ、我々を殺すのか。我々を殺すんだったら早いほうがいいぞ」というように、私たちはいつも訴えています。だから、今、二平先生が言うように、もうちょっと辛抱したら、今度はカツオが増えてくるんじゃないかと思っています。それまでもうちょっと気長に、というと怒られるけれども、待ってみましょう。今度の会議には必ず僕も訴えます。徹底的にやってくる予定です。だから心配せんと、もう少し待ってください。頑張ります。一緒に頑張ら

ましょう。

**二平：** どうもありがとうございます。近かつ協さん、そして中型竿釣船の方々もカツオ資源が減ってきていることで本当に困って、毎年頑張っておられます。水産庁交渉をやっておられます。大変苦勞をされてやっておられます。やはりひき縄の方々、ケンケン釣りの方々と共通していると思うんです。ただ、ケンケンの業界というの



は残念ながら横の組織がないんです。ですから、是非ケンケンの方々をお願いをしたいのは、やはり千葉、静岡、三重、和歌山、高知、宮崎、鹿児島県のケンケン漁をやられる方々、是非、横の連絡組織を作っていただきたいのです。ここにおられるどなたでもいいです、会長にまつりあげて、できれば大きな印鑑の一つ作り、文書を書いて、ポンと印鑑を押して、それを水産庁長官へ出す。役所というのは文書であがってこないと検討をしません。どんなに旗を立ててワイワイ農林水産省の前に行ってデモをしてもその時だけで過ぎてしまうので、自己満足で終わってしまいます。やはり文書をきちんと出せる組織を作ること、是非それを今日の串本のシンポを機会に検討をいただきたいと思います。僕らもいくらかでも応援をしますので、皆さんの意見を一つにまとめて文書を出すということを検討していただければいいかなと思います。声の大きい長野さん、どうでしょうか。

**長野：** それはもう先生、願ってもないことです。それが良いなと以前から思ってるんですけど、なかなか自分らは腰が落ち着かない商売です。そして、千葉県得天松丸さんのところはもう十何年前から500~600人の団体を作って動いてくださっている。この天松丸さんのように頭もないけど、動けない、僕たちでは。だけど、和歌山はさっきからケンケンの発祥などといろいろと見せてもらって、改めて自覚せないかなと。今のようなテーマを格好良くしていかないかなと感じました。

**鈴木：** 自分は今回二つ考えてきたことがあります。やはり一つは、全国の黒潮圏でカツオをやっている人たちの組織を作ったらいいなということは思ってきました。それで、和歌山はひき縄の元祖ですので、和歌山の人たちが声をかけてくれたら、みんな賛同はできるし、全員協力してくれると思います。自分たちも全面協力をしますので、ケンケンの発祥の和歌山からそういう組織を作ってもらったら理想かなと。それと、そういう組織ができたなら、国際会議にも出かけ、みんな本当に困っているという声を世界に発信することが大事だと思います。もちろん日本の水産庁の長官にも言わなければいけないですけど。自分らは茨城に二平さんを訪ねたとき、カツオが少なくなっているということを聞きました。亡くなった前の組合長の安食（あじき）さんが、「これは外国へ行ってカツオの問題をやったら早いよ。日本の国内の意見より外国からの声に日本政府は弱い。外国へ行ってとにかくカツオ問題をやろうか」と言って、フィリピンのセブ島で開催されるNGOの会議に出かけました。このNGOの本部はインドのマドラスにあるんですが、37か国ぐらいの人が集まった会議です。まず行って、最初は7、80人ぐらいいた人間が全員「グッドモーニング」とちゃんと挨拶をしてくれて、私が日本人と分かたら半分は挨拶をしなくなっちゃいました。何でだと思いますか？というのは、日本もやっぱり戦後、近海から沖合へ、沖合から海外へということで、どんどん大きな船を造っていった

訳です。だから向こうだと手こぎのボートでやっている所へ日本の大型船が行って獲るわけです。だからやっぱり日本のイメージは悪いわけです。ちょうど1週間行ったのですが、3日目に日本の時間があって、自分はケンケンをやっているビデオを持って行ったんです。外国の参加者はそれを見てから変わりました。日本はこれなら良いて言うんです。自然に優しいと。だから日本のイメージというのは、大型まき網で魚を獲る乱獲型というイメージしかないわけです。でもこういうふうに見れば小型船のほうが多い。日本にも小型船の漁業があり、こんなふうに行っているのかと。サンパウロ大学の教授なんかは信用しないんです。終わってから勝浦に見に来て、分かったと。日本はこういうことをやっているのかと。だからおそらく小型船が困っている事を世界に発信するというのはすごく早道だと思います。ただ、あのと時の作戦からいけば、やっぱり日本の一般の消費者の人たちにも海の様子は知らせないといけない。そういうのをもっとしなければいけなかったのかなというふうに反省しています。

二平： 次回はフィリピンでカツオを考える「カツオを語る in フィリピン」集会で船頭さん皆さんに参加していただいて開催するのがいいかもしれませんね。やはり小型船の漁業が一番数多くて地域を支えているんだという話を是非してもらい、だからカツオを大切に。外国でも小さな船の方々はいっぱいいるので、そういう人たちと一緒に声を上げていくということが大切なのかなと思います。鈴木さんがあの時代に漁師さん二人でセブ島へ飛んだという話は、私の新聞記事にも書いておきましたが、そういう漁民の方がいたということに、私も非常に感銘を受けました。国内だけじゃなくて、国際的にもカツオのことを訴えていくことを目指して皆で頑張ろうということです。今後ともまたこういう機会があれば、活動について語り合う機会を持ちたいと思います。その時は、あ、少しまた変わった兆しがでてきた。ちょっとカツオが増えだしたよという話が皆さんの前でお話できるとうれしい



なと思います。そういう機会が来ることを、また私も願っています。今日は長い時間ありがとうございました。とても良い集会ができたと思います。船頭さんたちには、漁を休んでわざわざ来ていただきました。最後に温かい拍手をよろしくお願いします。(大きな拍手)





二平章

40

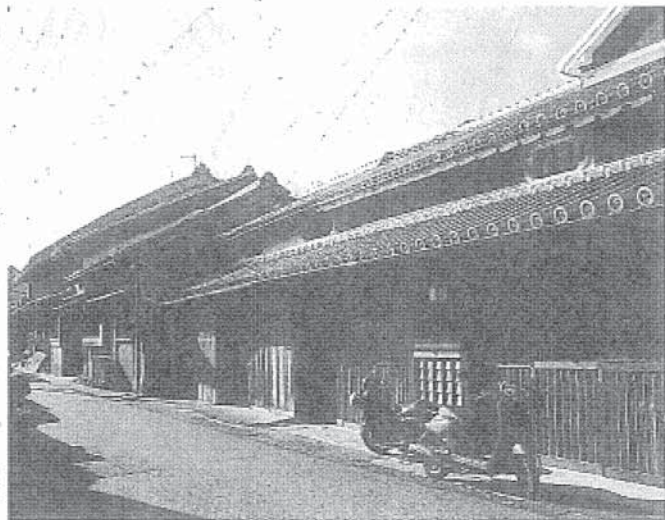
東日本大震災の津波 ったという。浜口家も 災害を受けて注目され その一つで初代儀兵衛 た人物の一人に浜口梧 は1645(正保2) 陵(こりょう)が 年、千葉・銚子に渡っ て醤油を醸造し、江戸 への販売を始める。こ れが現在のヤマサ醤油 の始まりである。

(文政3)年、和歌山 市から南へおよそ20キ 離れた広村(現・広川 町)に生まれた。広村 は「醤油(しょうゆ) 発祥の地」湯浅村と川 舟を挟んだ隣町である。 醤油は鎌倉時代、禅 僧が中国で覚えた味噌 (みそ)の製法を湯浅 の村人に教えた時、仕 込みを間違えて偶然で きた「たまり醤油」が 始まりとの説がある。

江戸時代、湯浅醤油 「安政南海地震」が広 村を襲う。津波の襲来 を予知した梧陵は刈り 取った稲を積み重ねた

# 紀州人の東方進出

醤油発祥の地とされる和歌山・湯浅の古い町並み(昨年12月)



「稲むら」に火を放つ ことで、逃げ道を示し て村人を救った。

その後の梧陵は炊き 出し、避難所開設、救 援米の手配、農漁民へ の事業再開資金の提 供、家屋の無料提供な どの復興対策を次々に 打つ。さらに復興に手

醤油発祥の地とされ 需要が増えたカツオを 求める出漁する漁民が 増え、銚子のカツオ船 は50隻を超えていた。

次郎右衛門が外川浦に 築港した約100年後に記 録された過去帳によれ ば、外川浦居住25人の 9割が紀州出身者で、 その半数以上の17人が 広村と湯浅村の出身者 であった。

ほかにも千葉・太平 洋岸の各地の寺院の過 去帳には多数の広村、 湯浅村出身者の名が残 る。東国の漁場開拓に 彼らが果たした功績は 大きい。

初代儀兵衛は次郎右 衛門と同時代を銚子に 生きた。おそらくカツ オの刺身を前に酒を 酌み交わしながら、故 郷の広村について語り 合ったに違いない。

(茨城大学地域総合 研究所客員研究員)

■ 随時掲載



# カツオの自然誌 西と東

二平章

41

長崎の港から西へ100  
キ。東シナ海に面し  
て、五つの大きな島と  
約140もの小島からなる  
五島列島がある。

秀吉から江戸幕府の  
時代、キリシタンは過  
酷な迫害を受けた。し  
かし、五島の藩主は比  
較的キリシタンに寛容  
で、大村藩(現在の長崎  
県大村市)などから開  
拓民として隠れキリシ  
タンを受け入れた。そ  
のため、五島には今も  
キリスト教徒が多い。

明治になって信仰の  
自由が認められると、  
五島各地で堰(せき)を  
切ったように次々と教  
会堂が建てられた。今

では、浦々に築かれた  
美しい教会堂を巡る旅  
が人気になっている。

五つの島のうち、北  
東に位置する中通島は  
不思議と島が十字架の  
形だ。島内には29もの  
教会があり、100年たつ  
今でも信者たちの祈り  
の場として守られてい  
る。

この中通島の南端近  
くに奈良尾の町があ  
る。この町を1969  
(昭和44)年、和歌山  
県広川町(旧広村)の  
2人の調査員が訪れ  
た。2人は共同墓地に  
残された広村出身者と  
される19の無縁墓碑を  
丹念に調べた。

## 龍馬も味わう？



この墓碑に残された  
年号は1625(寛永  
2)年から幕末の18  
60(万延元)年まで、  
実に二百数十年にわた  
っていた。紀州広村の  
漁民たちは、ほぼ江戸  
徳川の時代を通して、  
五島の奈良尾に渡来  
し、異郷の地に骨を埋  
めたことになる。

旧広村にある寺院の  
過去帳にも旅漁漁民の  
死亡記録が残り、17  
06(宝永3)年から  
想像される。

では、いつごろから  
五島への旅漁が始まっ  
たのだろうか。

1848(嘉永元)  
年に奈良尾の代官に提  
出された書簡には、関  
が原の戦いが起こる5  
年ほど前の1596  
(慶長元)年ごろより  
「毎年、初秋になると  
紀州・広村の漁師がカ  
ツオ釣りに五島に現  
れ、次第に奈良尾に定  
住するようになった」と  
ある。

旧広村の漁民たちが  
関東や西国方面に進出  
した背景には、158  
5(天正13)年の秀吉  
の紀州攻めと同年の大  
地震、1604(慶長  
9)年、広村で70戸が  
流失した慶長の地震・  
津波、1707(宝永  
4)年に紀州や土佐を  
襲った宝永の巨大地震  
と津波が引き金になっ

たとされる。  
三陸沖がカツオの盛  
漁期に当たる夏から秋  
にかけて、今でも五島列  
島周辺にはカツオの好  
漁場ができ、長崎にも  
水揚げされる。五島の  
カツオは丸々と太って  
脂が乗り、なかなか美  
味である。  
江戸末期にも、五島  
のカツオは長崎に運ば  
れた。坂本龍馬は神戸  
海軍操練所塾生たちと  
長崎に入って「亀山社  
中」を設立し、しばらく  
長崎生活を送った。青  
年志士たちとはもちろ  
んのこと、妻のお龍や  
丸山の若者お元、油屋  
町の女性富商だった大  
浦慶らと、土佐とは一  
味違つ五島のカツオを  
味わったかもしれない。  
(茨城大学地域総合  
研究所客員研究員)

■ 随時掲載





二平章

42

江戸時代の紀州（現在の和歌山県）漁民たちは、北は青森・陸奥湾から西は五島列島まで、帆と櫓（ろ）を頼りに小さな船で旅漁に出た。

和歌山県すさみ町の長野博さん（71）は、他県でも有名なケンケン漁師の一人だ。ケンケン（引き縄）漁は親から長男が継ぐのが普通で、1956（昭和31）年、16歳で親の船に乗った。当時はスクリューに当たるほどカツオがいて、季節に沿ってリレーのごとく、次々と魚が来遊したという。

1月はヨコワ（クロマグロの幼魚）、2月はクロマグロ、ピンナガ、マカジキ。カツオは3〜6月に釣った。20歳代からは小さな木船で一人で静岡、千葉、茨城へと旅漁に出た。70歳を超えた今でも同じだ。紀州沖のカツオ漁は3〜5月が盛漁期だが、4月下旬になると関西では魚の値段が安くなる。そこで旅漁へ出るのだ。

# 江戸から続く紀州の旅漁

和歌山・すさみ港でケンケン漁の準備をする大津丸の長野博さん（1月）



はサワラ漁をやっている。山崎広義さん（82）も和歌山・串本のベテラン漁師だ。1947（昭和22）年、17歳の時、親と一緒に船に乗った。船は4トの木船、帆があり10馬力の焼き玉エンジンだった。風があるとエンジン

を止めて帆を張り、風をまかせてケンケン漁をやった。当時は潮岬の2〜3岬沖がカツオ漁場で、同じ場所でも100〜200メートルもあるクロマグロも釣れた。

大島近海に出漁したきり、長年海を見続けた長老二人が口をそろえて話すが、カツオの異変だ。昭和30年代まではナブラ（群れ）がいた。紀州沖には次から次に群れが来て、カツオだらけだった。

3〜4月には地元でカツオを追い、5〜6月に伊豆に出漁。7〜8月には千葉から福島沖のカツオを狙う。その後、船を福島に置いて、船を福島の置いたまま甲本に帰ってお盆を過ごし、9〜11月に「下りカツオ」を狙いに再び茨城沖へ出掛ける。

正月から2月には今度南の屋久島までカツオ、ピンナガ漁に行く。2年間だけがクロマグロを追って宮古島から北海道小樽沖まで出漁したこともあった。江戸時代、三陸から五島列島までカツオを追い旅をした紀州漁民の血は今の漁民たちにも脈々と流れている。

茨城大学地域総合研究所客員研究員  
川崎 随時掲載





二平章

43

一昨年の暮れに「武士の家計簿」という映画が公開され大ヒットした。原作者は茨城大学文学部の磯田道史准教授である。磯田准教授は東京・神田の古本屋で手に入れた加賀藩の武家の「家計簿」を丹念に調べて、「刀でなくソロバンで家族を守った侍を描いた。庶民の日常の生活や出来事は、なかなか歴史に残らない。古本屋の片隅に残された資料が、知られることにな

かった「普通の武士」の生活を見事によりみえらせた。

漁師の日常も、なかなか記録には残らない。海や漁獲様の年々の変化は、漁獲統計だけでは分からない。高齢の漁師たちが語る経験は、時として貴重な情報を私たちに与えてくれる。

以前、「ブルーユニオン」という漁業問題を考える団体があった。そのメンバーが中心となって、日本近海に来

# 漁師が語る異変



土佐清水市内の居酒屋で、地元の曳き縄漁師に聞き取りを行う筆者(左端)。太平洋岸各地の漁師が、カツオの長期不漁に直面している＝2月

遊してくるカツオ資源を守ろうと会議を開いた。そこでの発言記録が、「漁村」という小さな雑誌に掲載されている。10年ほど前、黒潮水温であつても、大き

が接岸する西日本各地の海でカツオ曳(ひ)き縄漁師たちが抱いた実感である。

「最近ではカツオの適

い群は少なく操業時間が長くなった。15、16年前(1984年ごろ)は黒潮の沖側へ行けば大型の群れがあつたが最近はない。それだけ資源が減っている」(千葉)

「近年、魚体が小型化した。多獲年が少なくなつた。カツオ資源は減っている」(宮崎)

「8、9月に漁獲される体長15、25センチのカツオが、昭和55(1980)年ごろからほとんど見えなくなった」(和歌山)

「数年来(1996年ごろから)、50センチは海上で約1.8センチ以内での漁獲が激減している」(徳島)

「近年、土佐湾では、10センチ以内で曳き縄で水揚げされることはまれになった。50、60センチでは、少量のカツオが短期間釣れることがあるが、通過程度であるため大漁は期待できない」(高知)

「曳き縄漁場が50、80センチ遠くなったため、過剰な漁船設備資金が必要になった」(和歌山)

「5ト以下の小型船は、壊滅状態で一匹のカツオも水揚げできない状態になった。カツオ曳き縄船の転換を模索中である」(高知)

「2007、8年(1990年代)下りカツオが戻らんようになってきた。たくさん戻ってきた頃は、多く釣るために、最終の獲りの時刻を延長してもらったくらいだ。今年(1998年)ほど釣れんことはない」(三重)

「10年くらい前(1989年ごろ)からカツオの群れが小さくなつていると感じる」(千葉)

「昭和30、40年ごろには沖合200、300メートルでカツオ漁ができたが、最近はその浜はほとんどない」(和歌山)

各地の漁師たちの話に共通するのは、カツオ来遊の異変は80、90年代には始まつていた、ということである。

(茨城大学地域総合研究所客員研究員) 二平章 随時掲載



# カツオ漁考えるシンポ

## 串本の水産試験場で18日

串本町串本の真水産試験場は18日午後1時～4時半、同試験場で、第10回食と漁を考える地域シンポジウム「紀州漁民の活躍史とカツオ漁の今を考える」を開く。

東京水産振興会と漁業情報サービスセンターが2009

年度から、サバ類、イワシ類、サンマ、カツオなどの水産資源をテーマに全国各地で開催している。カツオについては愛媛県愛南町、高知県黒潮町に続いて3回目。和歌山県でも不漁が続いているカツオ資源の現状について、漁業者と研究者が意見を交わす。

第1部は「紀州カツオ漁民の活躍史をさぐる」をテーマに郷土史家による報告や、県内でブランド化に取り組んでいる「すさみケンケン鯉（かっお）」「しよらさん鯉」についての報告がある。

第2部は「カツオ漁の今を考える」をテーマにパネル討論がある。和歌山県漁協串本支所と同漁協古座支所、和歌山県漁協すさみ支所に所属す

る船頭の他、日本鯉節協会専務理事の細井哲男さん、千葉沿岸小型漁船漁業組合長の鈴木正男さん、真水産試験場の研究員が討論する。

宮城県気仙沼市在住の民俗学者、川島秀一さんの「紀州カツオ漁民と三陸のつながり」と題した報告もある。

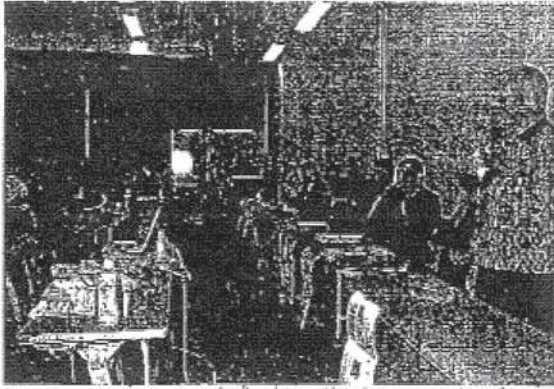
入場は無料で、事前の申し込みが必要。問い合わせは真水産試験場（07935・62・0940）へ。

紀伊民報  
2012年2月14日(火)

# カツオ資源を守れ

## 漁業者や 研究者 串本でシンポジウム

串本町串本の県水産試験場は18日、第10回食と産をまよる地域シンポジウム「九州徳島の漁業史とカツオ漁の今を考える」を同試験場で開いた。日本近海へのカツオの来遊量が減少し、不漁が続いていることを受け、漁業者と研究者が意見を交わした。地元でカツオのひき網漁（ケンケン漁）をしている漁師らは「カツオの群れが激減している。横のつながりを強めて国に働きかけるべきだ」と訴えた。



カツオ漁の現状を語る漁師ら  
(串本町串本の県水産試験場で)

東京水産振興会と漁業情報サービスセンターの共催で、約100人が参加した。第1部は「九州カツオ徳島の漁業史をさぐる」をテーマに、郷土作家らが座談した。串本町田並の雑賀敏也さんは、カツオのケンケン漁の起源について語った。明治時代に田並の住民がハワイへ移民してカツオ漁を始め、ハワイでは「ケンケン漁」と呼ばれる魚の羽に針をつけてカツオを釣り上げていたことから「ケンケン漁」と呼ばれるようになったという。雑賀さんは「既読であるが、田並がケンケン漁の発祥地であることは間違いない」と話した。

第2部は「カツオ漁の今を考える」をテーマに討論した。司会を務めた茨城大学地域総合研究所副所長研究員の三平喜久さんは、1986年前後から黒潮偏流海域でカツオの来遊量が減少し始め、2001年ごろさらに減少したと指摘。フィリピンやインドネシアなどの熱帯域で毎年20〜30万トンの未成魚がまき網によって大量に漁獲されているのが原因だといい、「熱帯域での大量漁獲を規制するよう、各国体や地域が手をつないで、国や国際会議を動かす必要がある」と主張した。

ある」と主張した。泉水産試験場副所長研究員の御所豊穂さんは、田並、すさみ、串本の3市町では、毎年カツオの水揚げが多い4月に100トンを動かせたことがなかったが、11年4月は約60トしかなく、「豊とも言えるカツオのない年だった」と説明した。和歌山南熊野すさみ支所に所属する大津丸の船頭、長崎の博さんは「昭和40年代にはすでに遠洋まき網漁が盛況しており、それから40年間、大した対策も取らずにやってきました。東水産行政に疑問を感じる。東方にはまだ少しカツオが残っているようだが、和歌山半島の南方からの魚群が多い時の2、3割しかなく、とにかくカツオが近海で捕れなくなっている。漁船の燃料の値段も上がって非常に苦しい」と現状を訴えた。和歌山県徳島串本支所に所属する安崎丸の船頭、寺本正勝さんは「カツオは海にたぐさいるものだと思っていたが、暖かすぎて、10年前に水産庁に訴えたが、統計に出していないとして対応してもらえなかった。串本はケンケン漁の発祥地でもあるので、横の連絡を密にして国に働きかけたい」と話した。千葉県八宝漁船協業組合長の鈴木正男さんは「カツオ漁に出たら赤字になり、食っていけない人が増えている。無期で活動している人たちが、組織をつくり、困っている漁民を世界に発信できれば」と訴えた。





パネル討論「カツオ漁の今を考える」で活発な意見を交わす漁業者ら  
=18日、串本町串本



約100人が参加した  
シンポジウム会場

# 資源保護の訴え世界へ

## 「ケンケン漁」発祥の地でシンポ

不漁続くカツオ

カツオの引き縄漁法である串本町で漁の歴史「ケンケン漁」発祥の地を振り返り、魚資源について考える地域シンポジウムが18日、串本町串本、県農林水産総合技術センター水産実験場であった。研究者と現場の漁業者が出席、不漁の現状を報告しながら討論を展開し、国際会議へカツオ資源保護を訴える体制づくりの必要性を確認した。



二平章さん

本、県農林水産総合技術センター水産実験場であった。研究者と現場の漁業者が出席、不漁の現状を報告しながら討論を展開し、国際会議へカツオ資源保護を訴える体制づくりの必要性を確認した。

(財)東京水産振興会と(社)漁業情報サービスセンターが共催し、平成21年から開いている「食」と「漁」を考える地域シンポジウムの10回目。カツオについては愛媛県愛南町、高知県黒潮町に続いて3回目の開催になり、近年大不漁とも呼ばれる状態になっているカツオ資源に焦点を当てている。

第2部のパネル討論では茨城大学地域総合研究所客員研究員の二平章さんが進行役を務め、地元から和歌山東瀬協串本支所の寺本正勝さん、古座支所の杉本武雄さんがパネラーとして出席。南漁協さきみ支所の長野博さん、千葉沿岸小型漁協の鈴木正男組合長、日本鯉節協会の細井哲男専務理事、県水産試験場の副主査研究員の御所豊穂さんらと意見を交わした。

二平さんは、黒潮源流の熱帯域とフィリピン沖での巻き網漁の漁獲が増え、資源が激減した状況を16年前の平成8年に報告し、「カツオ資源に黄信号」と警鐘を鳴らしていた。昭和55(1980)年ごろから減少が始まり、平成13年ごろから大きく漁獲量が減ってきた。また、漁獲されるカツオの大半は0歳(未成

魚)という調査結果も出ている。二平さんは「算出法に問題があるのではないか」と訴えた。漁業現場からもカツオ漁の深刻な状況が伝えられた。寺本さんは「漁師は肌で少なくなっているのを感じる。研究者が統計を取られるのも大事だが、浜の漁師の意見も聞いて欲しい」と語り、「これを機会に横の連携を取り合い、動きかけていきたい」と訴えた。千葉の鈴木さんも「発祥の地から組織を作ろう」と声を上げてほしい。国際会議で困っているという声を発信したい」と呼び掛

けている。二平さんは「算出法に問題があるのではないか」と訴えた。漁業現場からもカツオ漁の深刻な状況が伝えられた。寺本さんは「漁師は肌で少なくなっているのを感じる。研究者が統計を取られるのも大事だが、浜の漁師の意見も聞いて欲しい」と語り、「これを機会に横の連携を取り合い、動きかけていきたい」と訴えた。千葉の鈴木さんも「発祥の地から組織を作ろう」と声を上げてほしい。国際会議で困っているという声を発信したい」と呼び掛

けている。二平さんは「算出法に問題があるのではないか」と訴えた。漁業現場からもカツオ漁の深刻な状況が伝えられた。寺本さんは「漁師は肌で少なくなっているのを感じる。研究者が統計を取られるのも大事だが、浜の漁師の意見も聞いて欲しい」と語り、「これを機会に横の連携を取り合い、動きかけていきたい」と訴えた。千葉の鈴木さんも「発祥の地から組織を作ろう」と声を上げてほしい。国際会議で困っているという声を発信したい」と呼び掛

くしもと／ござがわ

# 串本・古座川



串本町

TEL:0735-62-0555  
FAX:0735-62-4977



古座川町

TEL:0735-72-0180  
FAX:0735-72-1858

串本支局 〒649-3503  
串本町串本1801 紀乃國屋ビル1F  
TEL:0735-69-2282  
FAX:0735-69-2285  
singu@kumanoshimbun.com

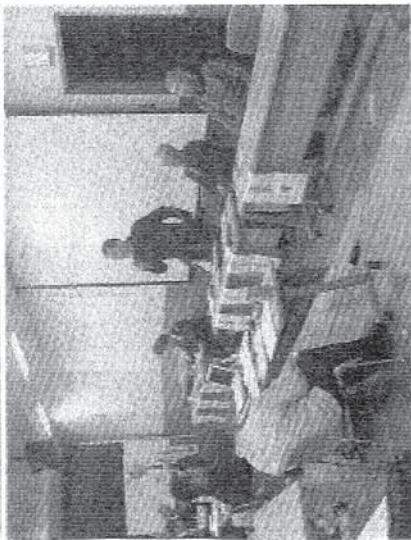


# ケンケン漁師も連携、資源対策を

「紀州漁民の活躍史とカツオ漁の今」

「食」と「漁」を考える地域シンポジウム

和歌山県串本町にある和歌山県農林水産総合技術センター水産試験場で2月18日、第10回目となる「食」と「漁」を考える地域シンポジウム「紀州漁民の活躍史とカツオ漁の今」



パネルディスカッションの様子。船頭問津がそれぞれの問題提起した（写真提供）

を考える（東京水産振興会・漁業情報サービスセンター主催）が開かれ、地元関係者ら110人が参加した。

全国のカツオ文化の故郷（ふるさと）とされる紀州のカツオ漁民の活躍史と、黒潮源流域のカツオ減少について、有刀漁船の船頭らを交え、パネルディスカッションで討議し、白熱した議論を繰り広げた。

第二部のパネルディスカッション「黒潮源流域のカツオの減少とむき縄漁」では、黒潮沿いのカツオ漁獲量が史上最低に終わった昨年の現場の動向を話し合った。パネリストの一人、船頭問津では全国区の知名度がある「和歌山東漁協・安崎丸の寺元正勝船頭は、「紀州の引縄漁で対象となっている、日本列島南からの魚群や南西からの魚群はここ数年、以前の2-3割しか来遊がないと感じる」と報告。

「燃油高騰も著しく、経営の厳しさが増している。われわれのような老船頭ばかりではなく、もつと若い人々が議論に参加し、横の連携を図ったうえで資源対策に努めるべきだ」と強く主張していた。

前半の第一部では、地元漁民の文化を研究している郷土史家ら3人が、紀州のカツオの歴史につ

いて述べた。その中で、串本町田並の郷土史家・雅賢徹也さんは「ケンケン漁法の起源と各地への伝播」で、ハワイの紀州移民を経由して取り入れた（疑似餌と潜行板を用いる）ケンケン漁法が、紀州漁民が伝道師となって昭和30年代に全国に伝わり、今日のカツオ引縄漁繁栄の基礎になったことなどを紹介。

ほかにも、和歌山県のカツオアランドとして有名なすまみケンケン鯨の取り組みについてすまみ町商工会の朝本紀夫会長が、「じよらさん鯨」の取り組みについて和歌山東漁協吉村健三理事が、それぞれ話した。

冒頭、出席した全国近海かつお・まぐろ漁業協会の三嶋則行会長は、竿釣船の漁業者代表としてあいさつ。「引縄船と同じ資源を供給する団体として、カツオ資源の先行きを心配している。現在の資源保護の議論は、漁業種類の違いからなかなか同じ方向を向けない。だが今、世界で研究者中心に行われている協議の内容と、現場の漁業者の情報をつなぐことがわれわれの責任だ。今回のようなシンポジウムが、資源に対する地域の議論活発化や中央の意識変化につながるものと思っていると、研究熱の盛り上がりを受け入れていた。

水産経済新聞 2012年2月27日（月）付3面

## 「食」と「漁」を考える地域シンポとは

「農」や「漁」の営みは、人々が生きていくためのかけがえのない食料を生産し、農村や漁村において、自然と人間との調和的な関わりを保ちながら、地域文化の基礎をつくりだしてきたといえます。そして、農村や漁村での食料生産の営みの安定こそ、国の社会的安定性を維持するために重要不可欠なものであるといえます。日本の「食」を支える地域漁業の発展と魚食文化の育成のために、「食」と「漁」を考える地域シンポに取り組みます。

### 開催実績

**第1回**：銚子の魚イワシ・サバ・サンマの話題を追って

と き：2009年12月5日（土）13:00～16:00

ところ：千葉県銚子市・銚子市漁業協同組合4階大会議室

報告者：川崎 健（東北大名誉教授）・小林 喬（元釧路水試）・岡部 久（神奈川水技）

参加者：140名

**第2回**：食としてのカツオの魅力を考える

と き：2010年1月9日（土）13:00～16:00

ところ：愛媛県愛南町・御荘文化センター

報告者：二平 章（茨城大地総研）・河野一世（元・味の素食文化センター）・

明神宏幸（土佐鰹水産KK）・藤田知右（愛南漁協）・菊池隆展（愛媛水研セ）

参加者：110名

**第3回**：「黒潮の子」カツオの資源動向をめぐって

と き：2010年1月11日（月）13:00～16:00

ところ：高知県黒潮町・黒潮町総合センター

報告者：二平 章（茨城大地総研）・新谷淑生（高知水試）・東 明浩（宮崎水試）・

竹内淳一（和歌山水試）

参加者：120名

**第4回**：水産物の価格形成と流通システム

と き：2010年3月12日（金）15:00～17:00

ところ：東京都中央区豊海町・東京水産会館

報告者：市村 隆紀（水産・食料研究会事務局長）

参加者：80名

**第5回：サンマの生産流通と漁況動向**

と き：2010年8月21日（土）13:00～16:00

ところ：千葉県銚子市・銚子市漁業協同組合大会議室

報告者：本田良一（北海道新聞社）・小林 喬（元釧路水試）・鈴木達也（千葉水総研セ）・  
小澤竜二（茨城水試）

参加者：110名

**第6回：道東サンマの不漁をどうみるか**

と き：2010年11月12日（金）13:00～16:00

ところ：北海道釧路市・マリントポスクしろ3階大研修室

報告者：中神正康（東北区水産研究所）・小林 喬（元釧路水試）・  
森 泰雄（北海道釧路水試）・山田 豊（北海道荷主協会）・  
本田良一（北海道新聞社）

参加者：170名

**第7回：タコ日本一・魚のおいしいまちひたちなか**

と き：2011年9月17日（土）13:30～17:30

ところ：茨城県ひたちなか市・ワークプラザ勝田

報告者：二平 章（茨城大地総研）・根本悦子（クッキングスクールネット）・宇野崇司（那珂湊漁協）・  
根本裕之（磯崎漁協）・熊田 晃（磯崎漁協）・岡田祐輔（磯崎漁協）・  
根本経子（那珂湊漁協）・千葉信一（多幸めしシジケート）・鯉沼勝久（株あ印）  
横須賀正留（ひたちなかトカチャー研究会）・清水 実（ひたちなか商工会議所）

参加者：300名

**第8回：鹿児島ちりめんの魅力を語る**

と き：2011年10月15日（土）13:00～16:00

ところ：鹿児島県鹿児島市・ホテルパレスイン鹿児島

報告者：廻戸俊雄（株ジャパンクッキングセンター）・小松俊春（元・江口漁協）・  
堤 賢一（志布志市商工会）・田浦天志（志布志市商工会）・  
大久保匡敏（鹿児島県機船船曳網漁業者協議会）

参加者：50名

**第9回：黒潮のまちでカツオを語る**

と き：2012年2月11日（土）13:00～16:00

ところ：高知県黒潮町・黒潮町総合センター

報告者：田ノ本明彦（高知県水試）・菊池隆展（愛媛県農林水産研究所）・  
福田 仁（高知新聞）・嘉山定晃（長井水産株）・東 明浩（宮崎県水試）

参加者：70名







---

**第10回** 「食」と「漁」を考える地域シンポ 報告集

---

2013年3月 発行

■編集・発行 一般財団法人 東京水産振興会

〒104-0055 東京都中央区豊海町 5-1 豊海センタービル 7階

TEL 03-3533-8111 FAX 03-3533-8116

社団法人 漁業情報サービスセンター

〒104-0055 東京都中央区豊海町 4-5 豊海振興ビル 6階

TEL 03-5547-6886 FAX 03-5547-6881

---